

ウィングス小説大賞**三次通過**

『五番目の女神・夢の果ての夢』

原稿用紙換算145枚

桂木香椰 著

序

真夜中の路地を、ただただリンカは走っていた。
不恰好な石を敷き詰めただけの、石畳。泥水のためったへこみに、サンダルつま先が引っかかる。茶色した水が、くるぶしを汚す。夜気に冷えきった肌は、その冷たささえも感じない。

喉が、荒い息で痛む。体は疲れ果てて休むことを要求しているのに、足だけは縛れながら止まらない。リンカの意思を離れて。

大通りから滲むかすかな光を、汗が弾く。
どこまで逃げればいいのか。
どうして。

「ッー！」

肩を、熱と痺れが貫いた。

転がる石のように動いていた足が、唐突に凍り付く。勢いだけは消えずに、転びそうな体を必死で支えた。

さらりと、流れた光沢のある砂色の髪。ほどけかけた額の薄布が視界を遮る。

薄紗の向こうに見えるのは、リンカと同じ造作の顔。

「燐火（リンカ）」

鏡像が、名前を呼ぶ。

ぬるりと、肌を生臭い血が伝っていく。

細い細い針が、肩を射抜いていた。

正面にあるのは、針の主。

「燐火、諦めろ」

同じ質の、わずかに低い声。

鏡に映したような、だからこそ

違いすぎる差を際立

たせる少年。

誰よりも燐火に相応しい、追跡者。

リンカの、対なる者。

「……灰（カイ）」

掠れ、荒れた声でその名前を呼ぶ。滑らかなカイの声と比べると、ひどくざらついて、耳障りが悪い。

多色の瞳が、ガラス玉みたい。綺麗だと、思った。

綺麗な綺麗な、灰。

怒って、笑って、泣いて。素直な素直な双子の兄。

それだけに、感情を押し殺した痛々しさを想う。

お願い。

そう続けようとして、我知らず口をつぐむ。

どうして？

力の抜けた体を奮い立たせて、全身の骨をつつかえ棒とするように立つ。

どうして？

きつく、同じ瞳、同じ肌、同じ唇、そして同じ血を分けた双子の兄を睨み付ける。

どうして、リンカが請わなければならない？

見逃して欲しいと、このまま逃がして欲しいと、お願いだからと。

希みがある。すべてを奪い取られた。そんな暗闇から生まれただけの希み。

自分のなかには、他になにも残っていない。

だから。

その希みのためだけの、誇りは捨てられない。捨てては、ならないのだ。

希みを叶えるために、いつか、顔を上げてあの人間の前に立つために。

頭を汚い石畳に摩り付けて赦しを請うリンカなら、それはリンカですらなくなってしまふ。

そんなことを、自分に赦すわけにはいかない。串刺しにされたほうがマシだ。

ぐっと、肩に突き立った針に手を伸ばす。ぎゅっと掴むと、指が血で滑る。

カイの唇が、かすかに動いた。

よ・せ？ 止められるなら、初めからここにいない。隠れ里を捨てて、こんな人間に満ちた城市（まち）には！

左の手はもう、動かすことさえできなかった。滑る指先と、流れる血と共に倒れこみたい欲求を抑えて、針を引き抜く。痛いよりも、熱い。うめきを奥歯で噛み殺して、空回る力を瞳に込めた。

抜けた刹那、鬨んだ赤い飛沫に眉を顰める。本当は、泣いて叫んで転げまわりたい。みっともなくても、喚きたい。声をあげた分だけ、痛みは薄れる気がする。そうできたら。

そんな自分は、どうしても救せない！

「あたしは……ここまで来て、こんなところで連れ戻されるわけにはいかないのよ……ッ！」

肩が熱い。頬が、熱い。

「退きなさい、灰ッ！」

「焔火ッ！」

はっと、カイが腕で目を庇う構えを取った。

「止せ、無駄だ！」

そんなの、わかってる！

あたしはただの、幻影遣い。なにも生み出せず、護ることも害することもできない。

「ただッ！」

灰の言葉に、こころのなかで叫び返す。

指先から手首、そして肘へと緩やかに流れる不快感に、

感覚を集中する。

勢いよく、針を払う。

飛んだ血の粒が灰の方へ飛ぶのを認めて、リンカは叫んだ。

「我と我が一族に流れる廃神（はいしん）の真名（マナ）にかけて、裔なるもの焔火が命じる！ 血よ、我が名のごとき輝きに満ちよ！ 我が敵を焼き尽くせ！！」

それは、神力ある音韻。

砂の民サアリが操る、神の真言（マナ）。

それを受けて、飛び散った血（マナ）が蒼く燃え上がった。

目覚めは、喪失。

眠りから醒めるたびに、自分が取り返しもつかないほどに欠けてしまったのだと、実感させられる。

繰り返し、繰り返し。

瞳を閉じるたびに、もう、二度とこの瞳を開きたくないと思う。

それでも 朝を求めてしまうのは、なぜだろうか。

瞳を凝らしても、闇は続いているのに。

独特の、香の薫りが鼻腔をくすぐった。
乾いて、翳んで、醸された葉を想起させる、心地良い匂い。

指先には、さらりとした清潔なシーツの感触。
遠くに、かすかなひとのざわめき。衣擦れの音。
ゆっくりと、リンカはまぶたを押し開けた。

まず飛び込んだできたのは、精緻な彫刻の彫られた木の天井だった。

磨き込まれた焦げ茶色の木目に、薄物を纏った女たちが舞う。彼女らは手に手に幾筋もの紐を絡め、その軌跡は天井を巡り華やかな彩りを添えていた。

彫刻工が魂を籠めて刻んだであろう、麗しい、女たち。
三方の異形の美女が、一際鮮やかに彼女らを統べる。

ひとりの女性の耳は、魚のひれのように広がり、波打つ髪がそれを縁取っている。

もうひとりの女性の耳は、羽。羽毛のように細かな髪が、架空の風になびく。

最後のひとかたの髪は、燃え上がる炎のように逆立ち、うねっている。

交じり合う、水の蒼。風の銀。炎の朱。

そして 瞳にかかる、リンカの髪の毛の砂色。曇った黄金。

「タレジュ、ファティ、アサン……」

「さすがによく、ご存知ですね」

呟いたリンカの背後から、唐突に声が投げられた。

ぱつと、勢いよく振り返る。

磨き込まれた、扉。片手に水差しと杯を持った青年が、静かな足取りで入ってくる。

「大陸を守護する三女神。水の女神タレジュ、風の女神ファティ、火の女神アサン」

「そんなの、三歳の子供だって知っているわ。神殿の説法で、誰でも聞けるもの」

子供をあやすような青年の口調に、リンカはきつい言葉で返す。

「そうですね」

ふっと、滲むように青年が微笑んだ。杯に水差しから水を注ぎ、リンカに差し出してくる。

リンカは、口を付けなかった。

「では、もう一柱の女神のことはご存知ですか？」

杯を無駄にあたためるリンカの手から青年は杯を受け取ると、ゆっくりと味わうように杯を乾した。そのうえでもう一度杯を満たし、リンカの手握らせる。

毒見、ということだろう。

ひとくち、杯の中身を含む。水だと思っていたものは、薬酒だったらしい。渋みと苦味と、それをごまかす為に混ぜられた蜂蜜の味がする。

よく、こんなにひどい味のものを乾せたものと思うものの、その貴重さは疑いようもない。ずいぶんと、丁重な扱いだ。

気付けば、傷付いたはずの肩にも厚く包帯が巻かれている。

「封じられた神、魔神と呼ばれる地の女神、人の子と契りを交わし、半神とも忌みの民とも蔑まれる一族の祖となつた墮神」

「……サアリ」

分かつていて言っているのだ、この青年は。

微笑みながら刺に被われた言葉を吐く青年を、リンカはきつく睨み据えた。

「そう、砂の民の名でもあります。彼の一族の真名を他族は精確に支配することはできないとも、言われていますね。なんでも、それは……」

「……サアリは、音に神力を絡め言葉を使う。連ねた言葉に神力を籠める他族とは、神力の操り様さえ、違うから」

そんなことを、一族の誰が漏らしたのか。

それとも

「あたしを、知っているの？」

まともに見つめて、問いを口に乗せる。

青年はかすかに目を見開いて、そしてまたもとの無表情にも似た笑顔をつくった。

「あなたの、知っているままに」

「ごまかさないで」

「さあ……あなたがご存知ないのなら、きっと必要のない人間なのでしょう」

「ふざけないで。あたしのこの傷を手当てしてくれたのも、あんたなんでしょう？ 道ッ端に転がっていたあたしを、わざわざ拾ってきたのも」

青年の纏う、普通の労働には決して向かない、聖なる深い蒼の長い裾。目がおかしくなりそうなほど、細やかな刺

繡。そして、辺りに満ちる深い神香。

じわじわと、その意味が染み込んでくる。

神殿、なのだ。ここは。

三女神を祭る、大陸至上の聖地。女神の名を冠した城市、タレジユの神殿。

「神殿の走狗がなぜ、あたしを助けるの?」

穢れとも、忌みとも蔑む砂の民の女。リンカの額を見たとても、身体に流れる血をすべて入れ替えたわけではない。神殿にとって、忌むべき存在であることには変わらないはずなのに。

褐色の肌。砂色の髪。オパールの子瞳。

すべての色を抜くことは、できやしない。神力の残滓だけは、身のそこそこにごびりついている。

「さあ……一目惚れをしたとでも言えば、信用してくれませんか?」

端正な顔で、しらっと言っただけ。

「ふざけないでって、何度言わせる気なの」

「べつに、ふざけているわけではありませんよ」

「じゃあ、言葉を変える。あんたは、あたしの質問になんにも答える気がないのね。そしてあたしのこと、なんにも訊かない」

まるで、リンカのことなどとうに知っていると言わんばかりに。

濁した語尾は、リンカの唇をかすかに震わせるだけで終わった。

「あんたは、一体なんなの?」

手応えのないものを殴っているような苛立ちが沸いてくる。それは、この青年の捕らえどころのない語り口のせいだけではなく、心に青年の声に合わせて、満ち干きするものがあるから。

言つなれば、リンカの、喪われた口。

「……どこかで、逢ったことがある?」

嫌なだけではない、既視感。掴もつと伸ばした指を擦り抜ける、なにか。

「さあ……」

ふい、と視線を逸らし、青年は寝台の脇に置かれた机に、水差しを置いた。

すべらかなガラスの水差しの表面をなぞる指も爪も瑞々しく艶やかで、よく手入れされたものだった。

「休んでいてください。すこし経ったら、包帯を替えましょ

う

低い声が、耳に心地良い。

やはり かすかな、懐かしさ。

もどかしくてもどかしくて、堪らない。

「ねえ……」

「では、また後ほど」

笑みを浮かべたままで、拒絶するように背中を向ける。

ふわりとなびく裾からは、部屋に漂う香よりも濃い薫りがした。

言葉の端々に、振舞いのひとつひとつに窺える、高位祭司の気品と傲慢さ。

きつと手ずから杯に薬酒を注ぐような人間ではないのだらう。

なぜ、リンカはここにいる？

「それでも……」

ごろりと柔らかな寝台に寝転んで、リンカは独り後ちた。そつと、額に這わせた指先が、ごつごつと堅く盛りあがった傷を探る。

肉ごと抉り取られたままの、赤黒く刻み込まれた傷跡だ。砂の民が額に持つ響銘石（バディス）の代わりに戴く、リンカの愚かしさの証。

理由はともあれ、リンカは水の神殿にいる。それだけが、リンカにとって大切なことだった。

この地を訪れば逢えると、信じていた。

誰に？

なぜ？

そんな当たり前の疑問を飛び越えて、深く。

蒼都（そうと）タレジュに……水の神殿において。

逆らい難い聲が、いつでも、胸のなかで響き続けている。

天神ヴァラヒとヴァラク。

その間に生まれし四柱の女神は荒れ果てた大地に降り立ち、様々な恵みをヒトに与えたという。

大地に、萌える緑と果実を。

吹き抜ける風のさやぎを。

流れる水の潤みを。

燃え盛る炎のぬくみを。

ヒトは女神を祭祀り、聖地を被い、神殿を建てた。

四柱の神々は永久に崇め奉られ、ヒトに恵みを垂れ続け

るはずだった。

そう　ひとりの愚かな青年が、女神に恋をしなければ。だが、それさえも起きてしまったことならば、運命であり神命ではなかったのか。

すっばりと頭から生成りの衣を被った患者の末裔は、そう思う。

眼前には、見上げてもお空を遮る蒼色の壁。

神殿をぐるりと囲むそれは、土で焼いたレンガの上に漆喰を塗り固め、蒼色の染料を幾重にも塗ったものらしい。容赦なく降り注ぐ陽光に色を失い、漆喰は剥がれかけていた。そのうえに、また気休めに過ぎない補修をかけるのだらう。

空よりも蒼い、偽物の蒼。

馬鹿らしい、ことだ。

流れる刻を押し返すようなことをするなど。

壊れるなら、離れるならそのままにしておけばいい。それに逆らうなど。

愚かな、ことだ。

剥離し石畳に落ちた欠片を踏み締め、少年はひび割れた壁面に指を伸ばした。

髪ひとすじ。

そんなかすかな隙間を残して、ためらうように指は止まる。

「やはり、あなたには触れることはかなわないのですね」

穏やかな声が、少年の気弱な様子を嘲った。

「廃神サアリの純血（マナ）を継ぐ者。カイ・イン・サアリ」

「……やっぱり、あんたか」

振り返りもせず、少年　カイは呟く。

「この、裏切り者」

「その顔に言われると、すこし傷付きますね」

「ぬかせよ」

揺らぎもなく、交わされる会話のなか。

びたり、と衣に隠された肩に青年が携えた剣が突き付けられる。

ぴりりと伝わる、電流にも似た刺激。

その、刃のためだけでない痛み、衣の陰でカイはわずかに顔を歪める。

「砂の民は、三女神の神力（マナ）にひどく弱い。なぜでしょうね、もとは同じ神族であったはずなのに」

「砂の民には、三女神の血もまた受け継いでいるから。そして、その血をサアリの血で育て、別の血を創り上げたから」

元は同じであるものへの、女神の憎悪をその身に受けた。「そうですね。そのためにあなたは火を操ることができる」でも、そのためにカイは神殿を被う塀ごときに阻まれ、ささやかな呪が込められただけの神剣に怯えなければならぬ。

似て非なる神血が 神力が、反発し合うのだ。

だが、その定まりを超えた存在があることを、対峙するふたりは知っていた。

四柱の女神の血の果て、交わることなき神力をひとつの身に受けた、稀有なる少女 四神の娘とも、称すべき姫君。

だからこそ彼女は、今も神殿のなかに在り、苦痛もなく息をされている。砂の民の血を、引いている筈なのに。

里を逃れてはならないという掟。

それを百度無視したとしても、彼女は里を出てはならなかったのだ。何も知らずに己を役立たずと嘆くその、神力の尊さゆえに。

「わたしたちよりも、あなたがたは本当の意味で神に近いのですね。穢らわしいことです」

「穢れてると思うなら近付くなよ。俺にも、燐火にも」

「厳しいことを言う。際立った穢れには、触れたくなくなるのが道理でしょう。治りかけの傷を、抉りたくなるように」

絶対的な優位を知る青年が、笑いながら筆で字をでも書くような気安さで剣を縦に引いた。

じり、と斬られるだけではない、焼かれるような痛みがカイの肩に走る。

カイは、振り返ることさえできない。

「リンカが傷を負ったのも、こちらの肩でした。彼女を傷付けた者には、それなりの制裁をしなければなりません」

「やはり……」

されるがままだったカイが、動いた。

目の前に立ちただかる壁を足場に、青年の背後に飛び。

靴底を透かし、直に鈍い痛みが足裏を焼く。

拳に炎を絡め、カイは青年の顔に叩き付けた。

それを、青年は構えた剣の背で防いだ。

神剣がカイの炎で溶け始め、カイの拳が神剣の守りで焼け焦げ始める。

嫌な臭いが、辺りに漂う。

「あんたが、あいつを捕らえているのか」

問いではなく、確認。

激しい動きに吹き飛んでしまった衣の下から、滑らかな褐色の肌に砂色の髪、そしてつりあがり気味の大きなパール色の瞳が現れた。

額には、なにかを隠すように、幾重にも布が巻かれている。

先ほどから話題にのぼっている少女　リンカと同じ顔立ち。

だが、先日リンカの炎に包まれたはずの身体には、醜い爛れはひとつたりともない。それこそが、リンカを幻影遣いと呼ばせる所以だった。

熱を以って暖めることも、火炎を以って焼き尽くすこともできぬ、不可思議な神力。彼女すら知らない　その、真価。

「勿体無いことをしますね……」

乱暴に少年の腹を蹴ることで鏢迫り合いを切り上げた青年が、へろり、と舌で熱で歪んだ剣を汚す血を舐め取った。

演出された、卑猥さ。

「あなたがたの血は、貴重な呪物（マナ）として同じ重さの金と同様の価値で取引されるものを」

強すぎる、神の純血の弊害。

「あんたはッ！」

げほっ、と腹を抱え、咳き込みながらもカイは刺し殺しそうな瞳で青年を見据えた。

「あんたは、これ以上なにを熾火に強いるつもりなんだ！」

喉が裂けそうな悲痛な声が、響く。

「これ以上、どうやって熾火を利用するんだ!?　もう、

充分だろう……アルヴィス！」

青年は薄く笑ったまま、答えない。

その瞳は、壁面に塗りたくられた蒼よりも、空に透ける蒼よりも、彼自身が纏う蒼よりも　純粹な蒼。

女神の色彩。

「なにを、しているのですか？」

間が抜けている　そう思えるほど、ひどく穏やかな声が部屋に響いた。

「散歩よ。あんたこそ、朝と違う服を着て、随分と気取っているじゃない」

対するリンカも、負けないほどに堂々と即答する。
「都の嗜みです。それにしても、そこから下へ飛び降りるのは、無謀と思いますよ」

開け放たれた窓。地面から、数階分の高さがそこにはある。

「やってみないと、わからないでしょ？ あたし、なんにもせずに諦めるのは嫌いな」

と、リンカは笑ってみせる。

その棧に片足をかけて、いまにもそこから飛び出さんとする姿勢には、いかにも不似合いな気軽さだ。

ふわり、とそよいだ風に、夜着の長い裾が揺れる。

それをくすぐったそうに見遣ってから、リンカは唇を歪めた。

「なぜか、きつちり扉には鍵が掛かっている。でも、あたしは外へ出たい。答えなんてもう、決まっているでしょ」

頼りなさにも過ぎる導きに聖地にやってきたからとて、どうしていいのかわからない。どうするべきかも、知らない。そんな苛立ちが、リンカを焦げ付かせていた。

せめて、方々歩き回れば、逢えるかもしれない。そう思うだけで、外に飛び出したくなかった。

それなのに、誰かさんが、きつちり扉に鍵をかけているから。

まるで リンカを、閉じ込めるみたいに。

「まだ、傷も治っていないのに？」

手にしたいつもの薬酒を置き、青年は無造作にリンカの肩を叩いた。

「い ツー！」

「ほら。まだ、動いてはいけませんよ」

棧から滑り落ちたリンカを支えて、青年はにこにここと笑った。

「あんた……言うことは、それ、だけなの……」

「大丈夫ですか？ リンカ」

「大丈夫なはずないでしょおッ！ って……」

微笑む端正な顔がすぐ近くにある。

初めて、気付いた。

青年の瞳が、こんなに深い深い蒼だなんて。

鮮やかに過ぎる色彩。

リンカは、その色の意味をよく知っていた。

知りすぎる、ほどに。

「……あたし、あんたに名前、教えたっけ」

青年の腕を払って、リンカはその蒼を睨み据える。

虚を付かれたような、一瞬の表情。蒼の瞳から、感情が抜け落ち　そして、あっという間に微笑みが戻る。

「あなたが、教えてくれたんです」

「嘔吐き」

吐き捨てて、すぐ後悔した。

ひどく、青年が痛そうな顔をしたから。

「……うわごとで、言っていたんですよ」

かすかな微笑み。

笑みで繕うことになれてしまった人間の、情性の笑み。

勝手に、手が伸びた。

「……え？」

ふわり、と青年の漆黒の髪が指先をくすぐる。

濃密な、香の薫り。

泣かないで。

ううん。そうじゃない。

泣いて。泣いたって、誰もあんたのことを責めないよ。泣かないと、壊れてしまうから。お願いだから、泣いて。アーヴ……。

胸のなかで、『自分』ではない『自分』が囁いた声が、聞こえた。

過去に、こんなことがあった？

既視感？

「……きゃあッ」

ばつと、リンカは青年を抱き締めていた腕をほどいた。

たたらを踏むように数歩、下がる。

青年の顔が、見れなかった。

「ごめんッ！　勝手に、勝手にッ」

「……着替えを、持ってきたんです」

にこり、と何事もなかったように笑って、青年が柔らかな布地を差し出す。

笑顔が、ひどく硬い仮面のように思えた。

リンカの視線ごときでは、決して突き崩せない。

「……あたし、このままでいいよ」

「なぜ？　ただの夜着ですよ」

「いいの」

頑固に言い切って、寝台に飛びこむ。

振動が、直に肩に響いた。

「いつたああ　　いッ」

「なに、馬鹿なことをやってるんですか」

呆れたような、青年の顔。

笑みではない表情に、ひどくほっとした。

壊れて、しまつから。

記憶のなかの、『自分』の台詞が、やけに気になった。

「そんな顔も、できるんじゃない」

「え……？」

違う表情が、見たい。見尽くしたい。

もっと、もっと　　もっと。

なにも知らない人間なのに、驚くほど強い感情が青年に向かつていく。

他人の筈なのに。砂の民が、他族に心を傾けることは、危険なことなのに。

まして 『蒼い瞳を持つ人間』になど。

風の銀眼、火炎の朱眼、水の蒼眼。その意味を知らぬ者など、この大陸に存在しない。

女神の、忠実なる下僕。

女神にその身と命を捧げ、無私に仕える者にのみ、その彩を与えられる。

「なんでもないよ。別に、着替えなんていらないうつてば」

「なんですか」

「なんですか……」

今度は、リンカが口籠もる番だった。

ぎゅっと柔らかに透ける裾を掴んで、知らず赤面する。

「だって……こんな、裾の長い服、いままで着たことなかったのよ」

「……」

「ちよっと、なに笑ってんのよ！　正直に答えたのに！」

「いえ……ちよっと……」

「ちよっとじゃないッ！」

くつくつと、顔を大きな手のひらで被って、青年は肩を揺らし続ける。

「だって、動くのに邪魔じゃない。着飾る用なんて、里じゃあ、なかったんだからッ！」

砂の民の隠れ里は、三女神の民の立ち入らない不毛の地に。

砂の民の歴史は、迫害の歴史。廃神の末裔という事実と、脈々と受け継ぐ強すぎる神力ゆえに、ひとから追われてきた。

生きるためには、女も子供も必死で働く必要があったのだ。

いつしか　一族は、外に『仕事』を求めるようになってはいつたけれど。

「動くたびに、ひらひらして……すごい綺麗なんだもん……」

「ちゃんと着替えにも、裾の長い服を持ってきましたよ」

目尻に滲んだ涙を拭きながら、青年は寝台の上に色とりどりの衣を並べる。

「どれを、着るの？」

「全部です」

「全部？」

リンカは目を丸くした。

衣の数は片手の指を越え、寝台から床へと垂れている。

「ええ、重なるんですよ。濃い色のものから薄い色の衣を透かして、帯で締めるんです。水の流れを想起させる、タレジユ特有の衣装だと言われています。そして、髪を結い上げて細い布を飾る。髪も結ってあげますよ」

「そんなこと、できるの？」

「ええ……わたしにはふたり従姉妹がいて、よく彼女たちの髪を結わされたんですよ」

「そう……」

床にぺたりと座り寝台に頬杖をついて、リンカはぼんやりと広がる布の塊を見つめた。

深紅、紅紫、紅から薄紅。河のように流れる帯は、紫紺だ。

血にも似た濃い色合いの布を摘みあげて、リンカは呟いた。

「あなたの血族なら、綺麗な蒼が似合うひとたちなんだからね」

「そう、ですね……綺麗なひとたちでした」

言いながら、滑らかな指が衣装を整える。

「あとで来ますから……これだけ着ておいてくれませんか。いくら着付けのためとはいえ、女性の肌を見るのはまずいでしょう。見物できないは、残念ですが」

「……ドスケベ」

「ほら、そう言われるでしょう？」

リンカの手を恐ろしく滑らかな手触りの布を押し付けて、青年は背中を向ける。

素直に頷いて、リンカは肝心なことを聞いていないと気

付いた。

「あんた、なんて名前？」

問い掛けに、奇妙に歪んだ顔。

「ご存知、ないですか？」

「うん。前に一度、訊いたっけ？ 訊いていないよな、確か」

「ごめん、と口走りそうになって、リンカは記憶を辿る。

それほど、頼りない瞳を青年はしていた。

「いいえ……教えていなかった、ようです」

するり、とリンカの髪を一房掬い、青年は唇を寄せた。

「アルヴィスです。アダイス・アル・エリティスとミトラの子、アルヴィス・アル・アダイス。アルでも、アーヴでも、お好きなように呼んでください。ただ……もう、忘れないで下さいね。……お願いですから」

奇妙な、言葉。

奇妙な、符号。

お願いだから、泣いて。アーヴ……。

「それって……」

問い返す前に、キスが落ちてくる。

きつく布で巻いた、額の傷のうえに。

ところが 痛い。

扉を閉じた瞬間、アルヴィスの口からため息が漏れた。

もう、触れることさえできないと思っていた。

艶めく金砂色の髪も滑らかな褐色の肌も、もう想うことしかできないと信じていた。

明気だけを集めたような笑顔も、もう向けられることはない。

それでも、血塗れの彼女を見付けたときの衝撃は、自分の意思では抑えようもないものだった。とつさに『逃がさなければ』ではなく『隠さなければ』と思ったのは、ただ、アルヴィスの欲。

都合のいい願い 昔のままの笑みを、抱擁を、アルヴィスに与えて欲しかったのだ。

そんなことが赦されるわけもないのに。

穢れた聖なる一族の、最も濃い穢れと聖性を集めた少女。凝縮した血の果てに、稀有なる神力を得た姫君。

穢れも聖さも、呼び方は違えども意味は一緒。すなわち

ひとよりも強い神力を、その身に抱えている。欠けても傷付いても壊れても、彼女の血の色は変わらない。

例え一片の血肉になっても、価値は変わらない。女神を欲する誰もが、彼女を求める。

彼女の身の安全を思うなら一刻も早く逃がすべきだと、アルヴィスとてわからないわけではない。

リンカを籠の鳥にするなど、愚かなことだ。自分も彼女も、危険に晒すだけ。この場所にいるだけでも、リンカは常に脅かされている。

この城市は、滅びに向かっていているのだから。なのに、ここだけは勝手に揺れる。

勝手に 揺れるのだ。どうしようもなく。

アルヴィスは恐る恐る、彼女を籠めた扉に指をはわせた額を、そっと付けた。

瞳を閉じた顔に、とろりとした笑みが浮かぶ。

正気と狂気の、狭間のような。

大切なひとを亡くした。

大切な想いも、失った。

いや 自分で潰したのだ。

ではここに残るのは、なに。

「……イス……」

ふっと、夢から醒めたように視線が鋭さを取り戻す。

「アル……イス、さまぁ……！」

弱りきった細い声が、アルヴィスと呼んでいる。

現実からの、呼び声だ。

「アルヴィスさま！ どちらにおられるのです？」

「ここに」

足に絡み付く長い裾を払って、アルヴィスは静かに言った。

細かな蒼糸で刺繍がほどこされた白い衣を纏った幼い少女が、ぱたぱたと足音を立てて走ってくる。まだ神殿に入ったばかりの、下位神官だ。

「ここに、いる」

どこにも、行かない。

どこに行っても、血はアルヴィスを追ってくる。

女神の、血と呪い。

ほっとした顔の少女に、にっこりとアルヴィスは微笑みの仮面を向けた。

表面を繕うのにも、馴れてしまった。

「ああ、こちらにいらっしやっただんですね。北位（アル）」
「タレジュ・セラムファースが？」

「ええ。東位（エル）が、奥宮までいらっしやるようにと」
件のひとの美貌を思い出したのか、少女の頬が赤くなる。

「南位（ヴィナ）も一緒です」

「そう、ですか……」

浮かぶ笑みは、諦めを誤魔化すだけ。

どこへも、行けない。

代わりに 夢を見る。

不毛の地にひっそりと在る隠れ里と、傷を刻みながらそれを庄するほどのひかりを放つ少女。

彼女と過ごした、瞬きほどの刻を。

閉ざされた扉に、鍵がかけられる。

ひどく冷たい金属音に、ため息が出た。

宝箱に掛ける鍵と、鳥籠に掛ける鍵。かたちは同じ鍵で

も 意図が全く違う。

この部屋の鍵は、どちらの鍵だろうか。

見たくないこと全部眼を瞑っても、そう疑いたがる自分がここにいます。

リンカの血と生まれを利用しようとする輩など、いくらでもいるけれど、彼も、そのひとりなのだろうか。

そう思うと、自分でも驚くほどの落胆に襲われる。

なにがいいのかわからないけれど、こころが、傾いてしまっている。

あんなあやふやな笑みを浮かべるだけ、なにひとつ明かそうともしない男に惑わされるなんて……情けない。

「独りでここにいるなんて、つまらないじゃない……」

寝台にいつもの数倍の注意を払い腰掛けて、リンカはふくれる。

ぴったりとした濃い紅色の内衣、ゆとりのある淡い紗を幾重にも重ねた衣。

重なる色はすこしずつ異なり、それでも変わらない紅を演出している。

リンカが動いたとき、かすかな風がぴたりと閉じられた窓の隙間から流れこむたびに、ゆらゆらと色彩が揺れる。

揺れる、あか。

それをみつめているうちに、くらり、とリンカの視界がぼやける。

もう馴れてしまった、理不尽な眠りへの誘い。

欠けた体の一部を癒そうとする、リンカの生存本能のなせる技だ。

「眠りたく、ない……」

額に傷を得てから 以前はそこにあつたはずの神力の源を喪つてから、あかい色をみるたびに襲われる眠気に、リンカは必死で抗った。

「眠りたく、ないの……」

頭を振る動きも、弱まっていく。

いつのまにか頬に感じるのは、寝具の柔らかさ。

眠るたびに、夢を見る。

見る夢はいつも同じだ。

揺れる紅蓮の炎。

燃え盛る火炎の最中にいるのは、リンカの祖母である村長・セイレンだ。

すでに、彼女は息をしていなかった。

死に絶えた体から伸びる、制御不能な神力の発現。初めて、リンカは火を怖いと思った。死を、怖いと思った。

セイレンの胸に現実感なくぼっかりと開いた穴。そこからとめどなく流れるのも、あか。

「婆さま……どうして？」

呟いた声は、ひどく掠れていた。

「どうして？」

絶るような、情けない声。

夢を見ているリンカは、恥ずかしくてたまらない。

他人に弱さを見せないのは砂の民の生きる術でもあり、毅然と顔を上げつつづけるのはリンカが自身に課した誇りの持ちようだった。

なのに、夢のなかのリンカはそれさえも忘れてしまっている。

無様な顔を、さらしている。

『彼女』の動揺を引き出したのは、セイレンの屍の傍らに立つひとりの男。

手には、長剣。それもまた、濡れた深紅にひかっている。

鮮血。

「どうして……？」

幾度めかの嘆き。

「どうして？ 俺は初めから、こうするつもりだったよ。返されるのは、感情の見えない冷やかな言葉。」

『彼』は振り返って、その剣を無造作に振り翳す。

リンカの、額に向かつて。

滴る血を舐め傷口から肉を抉り……そして囁くのだ。

蒼都タレジュに……水の神殿において、と。

逆光のせいで、彼の顔は見えない。

問いだけが、虚しくリンカの内側を巡る。

あなたは、だあれ？

夢のなかのリンカは確かに知っているはずなのに、夢見るリンカは知らない。ちっとも、わからない。

どうして、こんなに胸が重いのかも。

なぜ、こんなに哀しいのかも。

哀しみは自分のためではなく 『彼』のために、感じているのだ。血に溶けた涙も、『彼』のため。

そう、夢のなかのリンカは泣いていた。

自分の額から容赦なく響銘石を割り貫いた青年を、哀れんで。

夢を幾度となく重ねるのは、忘れてはいけないからか。

それでも夢をみるたびに、記憶は純度を喪っていく。

昨日見た夢では、『彼』の瞳を『哀しいほど綺麗だ』と思っていた。

それが、今日にはその色彩さえも覚えてはいない。

明日には、『彼』の背格好さえも忘れてしまいかもしれない。もしかしたら、性別さえも。

神話のなかの、口伝。

地の女神が孕んだひとの子は、ただ一握の砂として生れ落ちた。

地面が震え火の山が揺らくほどの妹神の嘆きを哀れんで、姉神たちはその神力を封じこめた石 響銘石と呼ばれる

貴石を砂塊に与えた。

そうして人の形をとったのが、砂の民サアリの祖。

ならば、額に戴く響銘石を喪ったサアリは、ただの砂塊に戻るのか。

それを証明するかのように、石を奪われた日からリンカの記憶は確実に消えていく。からだのなかが砂のようにさらさらと溶けていく、その恐ろしさはリンカが今まで感じたことのないものだった。

同時に、リンカの裡に宿るささやかな神力も薄れていった。いまでは、ちいさな幻影さえ血を媒体にしなければ起こせない始末。

役立たずな神力が真に役立たずになるのを、惜しむ気はなかった。ただ……自分のしらないところで、勝手に自分

が変質していく。

完全に記憶が消える前に 『彼』の存在すらも忘れ去ってしまふ前に、『彼』を殺し、石を取り戻さなければならぬ。

いや 石を取り戻しさえすれば、『彼』のことを思い出せる。リンカに恥辱を与えた『彼』に、制裁を与えることが出来る。

早く……早く。

夢のなかで感じるやるせない想いに、押し潰される前に。夢を、見るのは嫌い。

夢に沈むたび、なにか大切なものを落としてゆく。

繰り返し、繰り返し。

夢を見なければならぬのなら、いっそ、目覚めを喪いたい。

瞳を開くことなしに、ずっと、まどろんでいたい。

さらりと、乾いた風に漆黒の髪がかき乱される。

緩やかなアーチを描く柱の間。

瑞々しい緑と、その隙間に流れる涼やかな清水。

そして、その底に澱むのは

きつい陽光に瞳を細め、冷やかな蒼の玉石を踏み締め、アルヴィスは神殿の中央、四つの院に囲まれた塔へと歩きつづける。

清らかなる水の神殿。

そこは四位(タレジュ) 東位(エル)・西位(レス)・

南位(ヴィナ)・北位(アル)と呼ばれる最高祭司が司る四院と、その中央に位置する奥宮で構成されている。

神殿で起こる全てのことは、四位が協議し恙無く行うのが定まり。

四位は、女神手ずから神力を受けた、と伝えられている蒼眼の一族から選ばれる。

その神殿の司のひとり と呼ばれる地位が、アルヴィスの座。

鬱陶しいほど長い裾の蒼衣も、血筋が伝える女神の蒼に染まった瞳も、それらを嫌になるほどアルヴィスに見せ付ける。

ふつと瞳を閉じて、すうと息を逃す。
ちからを抜いて、改めてちからをこめる。

冷えきった拳を当てるのは、細やかな細工の施された両開きの扉。

甲が触れたか否かのところで、厚い木を通して投げられた声。

「お入り、アル」

低い、やわらかなやわらかな、嘘と憎しみを包みこんだ声音。

子供の頃のままの呼び名で、わざとらしい親しさを演出してくる従兄に、アルヴィスはもう一度、静かに息を吐く。

「入ります、タレジュ・セレムファース、タレジュ・アリアズナ」

天井の高い、殺風景に見えるほど広い空間。

まず目に入るのは、ひとつの貴石を薄く削り出した、丸い蒼の卓子。

数十人は並べるはずのそこには、四客の椅子が並べられているだけ。しかも実際に席に着いているのはたったひとり。

東院を司る東位・セレムファースが、端座というに相應しい姿でそこにいた。

卓子の蒼を照り返しているのか、肌は青く見えるほど白々としている。

長い髪はどこまでも黒々と艶やかで、蒼い衣はどこまでも曇りなく彼を飾っている。

女性めいた というよりも、匂いのない中性的な美貌。貧弱にもみえる凹凸のない体付き。

組み合わせた指にまで染み込んだ気品。そして、その瞳は透徹した蒼。

その色から目を背けて、アルヴィスはせわしく礼を取った。

「遅参しまして……」

「構わないよ。早く来たとして、なんの意味もない集まりだ」にこりと、彼は端正な顔に不気味なほど穏やかな笑みを浮かべる。

「そうね、意味がないわ。でもねえ、なににあなたはどつして無駄に集まりたがるのかしら？ セレ」

開け放たれた窓の棧に腰をかけ、片手に硝子杯を揺らし

た南院を司る女が、からかうように細かな笑いを漏らす。緩やかに波打つ髪は、アルヴィスやセレムファースと同じ、闇の黒。

酔いにまぎれ、細められた瞳はセレムファースともアルヴィスとも通じる水の蒼。

しなやかな身体は、窓の棧に片足をかけて座るという行儀の悪い姿もあいまって、猫のよう。

一族に与えられた色彩そのままの、世にも稀な美男と美女。

広い空間を支配するのは、三人だけ。

奥宮の最上階。傍仕えの女どもも寄せずに、四位だけで行われる定例の集い。

『四位』と呼ばれるのに『三』人だけ。そのことに違和感さえも感じぬようになったのは、いつのころからか。

もうひとりとは、失われてしまった。永遠に 戻らない。新たに生まれることすらない。

美しく優しく死の瞬間まで気高かった聖女。

西位タレジュ・シエスラー。

四位のなかでただひとり、本当の意味で女神の名を戴いていた女。

目の前でじつとアルヴィスを恨み続ける従兄と共に、彼女のためにならなにを犠牲にしても構わないと、そう誓った瞬間もあった。

「意味ないのは集まりだけではないわよね、そう思わないこと？ アル」

「タレジュ・アリアズナ……」

「やめて。昔のようにアーリ、でいいわ。あなたと誰が憎み合おうが愛し合おうが、わたくしには関係ないことですもの」

これだけはふたりと異なる深紅の唇を杯の縁に当てて、瞳だけでアルヴィスを追う。

その視線は揺るぎなく、存外強く、彼女が酔っているのは表層だけだということを容易に悟らせる。

「なにが起ころうと、関係ないことよ。人間ごときの足掻きなんて、無駄。ただ刻に流されるだけ。それを押し留めようなんて、愚かなはなしだわ。ねえ、そう思わない？」

そういって、ひとしきり笑い転げる。かすかに、真珠色の前歯に当たる硝子が音を響かせた。長い髪が、乱れて広がる。細い肩を、頼りなく覆い隠す。

「……面白い噂を、耳にしたよ」

笑い声を上げ続けるアリアズナを無視して、セレムファースが口を開く。

「北位が、褐色の肌の商売女を密かに北の院に困っている」と」

もうそろそろくると想像していた問い。それでも、俯いた顔が歪んだ。

濁りかけた声を、喉から絞り出す。

「……誤解です。たしかに、南方の女を数日前拾いました。だが……」

「別に、妾姫を娶るのを止めやしないよ。むしろ歓迎する。10人でも20人でも。子をなすのは一族の義務だからね」
神に仕える身にあるまじきことを囁いて、ちらりと杯を傾げるアリアズナに目を流す。

故意の振る舞いだ。窓の外に視線を留めたままのアリアズナの美しい横顔もまた、セレムファースへの頑ななまでの無関心を演じている。

空気が、痛い。

張り詰めた空気に、喉が圧迫されていく。

「どんな女だ？」

「違います。ただ、路地に転がっていた女が哀れで、拾っただけです。すぐに、北の施療院に引き渡しました」

「北の、施療院に」

「ええ」

「おかしいね。今、北の施療院に褐色の肌の南方女なんていないという話だけど」

「すでに施療を終えて出たのでしょうか。そう、ひどい怪我ではなかった。肩を少し、痛めただけでしたから」

そう、大してひどい傷ではない。もう、癒えてしま

う。
ちりりと、アルヴィスの胸が痛んだ。

理由が、なくなってしまう。

「そう。それはそれは」

肩を竦めて、セレムファースが呟く。

「折角期待したのに。アルの子供を抱くことを」

渡した瞬間に、きつと笑いながらセレムファースは赤子を抱き殺す。

ぼんやりと、床の模様も目で辿りながらアルヴィスは思

う。
アルヴィスの愛するものも大切な存在も、この従兄はきつと赦さない。

彼の大切なものを見殺しにしたアルヴィスを、決して赦しはしない。

「昔から、おまえは褐色の肌の女が好きだった」

セレムファースが、綺麗に綺麗に笑う。

綺麗な笑みの、補色は憎悪。やりばのない憤り。

アルヴィスに向けられるものは、ただの欠片だ。そうわかっていても、無視することなどできない。

ほんの二年前までは、四人で笑い合っていたはずなのに。

「悪趣味ないぐさね」

囁き手にした杯を無造作に落として、するりとアリアズナが立ちあがる。

硝子の、碎ける音。

白い床に散らばる、透き通った蒼。

白と蒼のコントラストに、しばしアルヴィスは目を奪われる。

「アリアズナ」

流石に眉をひそめたセレムファースの横を擦りぬけ、アリアズナは扉の前に立ち尽くしたままのアルヴィスの腕に白い腕を絡めた。

「不毛なことは嫌いだわ。ね、あなたもそうでしょう、アル」

「タレジュ・アリアズナ！」

「意味がないと初めに言ったのはあなたよ、東位。いと貴き四位が長、タレジュ・セレムファース。ならば、意味のないことに付き合うほど、四位は……すくなくともわたくしは、ひまではないわ。それとも、あなたはご自分の言葉が嘘だともおっしゃるの？」

「ひとの揚げ足を取るのにはよせ、タレジュ・アリアズナ！」
「事実を事実として申し上げただけ。なにを怒っていらっしゃるのかしら？ タレジュ・セレムファース」

セレムファースの叱責をもともせず、アリアズナはアルヴィスの顔を覗きこんでくる。

切れ長の、清んだ瞳がアルヴィスを映す。

セレムファースの彩とはまた違う、偽りも誤魔化しも赦さない、怖い瞳だ。

「行きましよう、アル」

「アーン！」

強引に腕を引かれ、焦って叫んだアルヴィスにアリアズナは唇の端を吊り上げた。

「そう！ そう呼んでくれなくては、返事もしないわ」
アリアズナに引きずられるように飛び出た回廊。
振り返った部屋には、笑みで欺かないセレムファースの
姿。

「馬鹿らしいわ」

神殿のなかにいくつも点在する泉。

そのひとつ、磨き込まれた御影石の縁に座るなり、アリアズナは言い放った。

「セレムファースの思い込みも、あなたの弱腰も」

吐き捨てて、苛立たしげに満ちた水を指先でかき混ぜる。

「それに、この城市もわたくしたちの存在も」

きつい瞳を泉の底に向けて、水面を揺らしつづける。

「もうとうに果てが見えているのに、なぜしがみつこうとするのかしら。あなたも、セレも」

「果てなど……」

「見えているでしょう？ はっきりと」

視線の矢でアルヴィスを射抜いて、アリアズナが宣告する。

「三人 いいえ、ふたりしかない血を残す祭司。なによりも、尽きてしまった」

「アーリ！」

あからさまな言葉に、アルヴィスは声を荒げる。

「そして澱みはじめた聖水」

泉から引き上げた指先には、かすかに銀色にひかる砂。

辺りにさざめくのは、水気に満ち満ちた木々。翡翠色の葉に日の光を浴びて、琥珀色の花弁を透かす水の恵み。

蒼都タレジュは、不毛の砂漠に生じた蒼い水の女神とひとの契約の証。かりそめの楽園だった。

だが、長い歳月の果てに契約は欠け、水の護りは綻び、じわじわと砂の汚染がはじまった。

急激な変化ではない。いまは、かたちばかりは変わらな
い。だからこそ、諦めきれない。なにか手立てがあるはず。そんな焦燥を、女神から神力を授けられた祭司の末裔
ならば感じぬはずはない。

己だけの意思ではなく、数百年ものあいだ脈々と受け継
がれた一族の責務であり、数千もの城市に住まう者たちへの
義務なのだ。と教えられ、幼き日より育てられてきたのだ

から。

それでも、アリアズナはもう果てが見えていると言いつつ。その強さは、驚嘆すべきものだった。

「この城市は、今を逃れたとて遠からぬ未来に滅びる。それが、女神タレジユと我ら一族の契約」

「……あなたは、強いですね」

「当然よ。わたくしは価値のない存在ですもの。誰にも踏み潰されないように、己で強く在らなければ」

そつと胸元に手をあて、むしる誇るようにアリアズナは言う。

「蒼都の礎である四位のひとりに、価値がないなど……」

「少なくとも、セレムファースにとつてわたくしは価値がない」

そつと、壊れやすいものに触れるようにアリアズナはもうひとりの血族の名前を呼ぶ。

「この城市を護りたい　いいえ、護らねばならないセレムファースには、わたくしの存在は苛立たしいだけでしょ。女の姿をしているゆえ、余計に」

歌うように、呟く。

祭司としての神力を維持するために血族での婚姻を繰り返してきた一族。前北位の妾姫だったアルヴィスの母を例外とすれば、彼らの父母もまた、機械的に定められた婚姻を結び、義務として子をなしてきた。

血族婚を繰り返し薄まらぬ血は嵩を減らし、いまとなつては一族と呼べる者は三人のみ。

そして、幾重にも血で血を重ねた弊害は、アリアズナの肉体にも宿っている。

どんなに誰かを愛そうとも、この美姫は決してその子を抱くことはない。

「この城市を愛していないわけではないわ。我ら血族が長きに渡り育んできた、麗しき都ですもの。でもひとを傷付けて、あがいてあがいて、泣いても叫んでもこの城市は消える。ならば、消えればいい。それが、運命というものでしょう？　砂の穢れが広がれば、自然とひとは去っていく。城市がゆっくりと滅びていく。誰も、傷付く必要などない」

託宣のように、囁かれる言葉。

それは、セレムファースの狂気にも似た想いに付き合う必要はないという忠告だ。

凜とした横顔は美しくて　すこしばかり、羨ましかった。

「そう、思い切るのは難しい」

ことに、一度選択を誤った者には。

二年前、アルヴィスはふたつの命、どちらも選べなかった。その結果、ひとりには死に、ひとりのところを失った。

いまのアルヴィスには、なにも選べない。

選ぶのは、ひどく恐ろしい。

だから、選択を先へ先へと伸ばしている。都合よく転がってきたぬるい現在に、逃げ込んでいる。

卑怯者だ。

「難しいとひとことで片付けられるのは心外だわ。わたくしだって、苦しみもせずこうやっているわけではないの。できないと決め付けて、遠くから眺めるようにするのは逃げでしょう」

「まだ、術が尽きたとは限りません。それをなにもせず手をこまねいているのは逃げでないとでも？」

「借り物の言葉を振り翳して、無闇にひとを責めるのもまた逃げだわ。最高に卑怯な、ね」

胸を突き刺すように、睨み付けてくる瞳。

その表面だけをさらうように、アルヴィスは彼女を見つめ返した。

「これは、俺の意思。誰から借りたものでもない、俺の言葉です」

そう言いつづけるのは、アルヴィスの贖罪。

自分の揺らぎが犯した罪は痛くて、罰が下されないのは堪えきれないから、神の役目を年上の従兄に与えてしまった。

そして、痛みを紛らわすために彼の言葉を「〇〇の意思」とし、盲信を装い続ける。

「馬鹿みたい。無駄な情熱を垂れ流して」

さらりと立ちあがり、アリアズナはきつく高い空を見据えている。

赤い唇が呟くのは、ひとつの名。

「でも、いちばんずるいのは、シエスラーラだわ……」

苦しみを分かたつことなく死んでしまった、ゆえに清らかな、永遠の聖女。

成長する力も生き続ける生气も、果ては命までも女神に啜られた、水の聲。

残された者の苦悩と混乱と憎悪を知らずに消え失せた、幸福な女。

女神の神殿を抱える聖都タレジユは、いくつもの名を冠している。

『蒼神』とも称えられる水の女神に肖って、蒼都・水都と呼ばれるのは一般的。

住人たちは、城市に点在する『それら』から、こんな呼び方してみせる。

『塔の都』タレジユ、と。

その名の通り城市のどこにあっても、低く高く聳え立つ塔と、それらを統べるように城市の中央に際立つ蒼水神殿の尖塔を窺い見ることが出来る。

最も砂漠に近い下町の、さびれた宿屋の窓からでさえ。

軋む棧に肘を乗せて、少年　カイはきつい瞳で塔を見つめる。見つめつづける。

「お兄さん！」

ふつと、夢から覚めたように、カイは視線を揺らがせた。

なにやら薄茶の色が染み付いた壁、角が磨耗した家具。

歴史とはいえない年季の入ったそれらと同じようにくすんだドアが、乱暴に叩かれつづけている。

「お兄さん！　ちよつと、いるんでしょ！？」

苛立った、甲高い声。

ふわりと麻布を被って、不機嫌に返した。

「いるよ！」

……うるせえな。

台詞の後半は胸のなかだけに、しぶしぶ扉を開ける。

ぼろぼろの旅装束の、しかも年若い怪しい客を長期で泊めてくれている宿など、あまりない。肌の色も、隠しているもののきつと見られているはず。それでも追い出さない女将を、あまり邪険にできない。

生来の態度の悪さは、いかんともしがたいところだが。

「なんだよ！？」

「なんだよじゃないだろ？　お客さんだよ、あんたに」

扉いっぱい、といったような体格の女将が、すこしだけ身を寄せる。

やはり床板の鳴く廊下に、日よけの薄紗を被った女が、ひっそりと立っていた。

一瞬、彼の背中を冷たいものが走った。

直感だった。どうしようもなく、足元から這い上がってきた嫌な感覚。

言葉にするなら、全身の血がその女を拒絶した。

凍り付いた彼の耳もとに、ぼそりと女将が言葉を落とす。

「あなたの客にしちゃ、随分とお上品な女だね。あたしは怖いよ。」この上流階級　神官様方は底が知れないんだ。取って食われるかもしれないよ。気をお付け」

「……砂蟲を驚掴みするあんたでも、怖い物ってあるのかよ」

「お黙り！　親切で言ってるんだよ、あたしは」

後でお茶を持ってきてやるよ。

不埒は赦さないと、女へ存在を示すように声を張り上げて、どすどすと女将が階段を下りていく。

「そんな、年端もいかねえガキじゃねえんだから……」

己の幼さの自覚もなく、カイはぼやいた。

憎まれ口を叩きつつ、無骨な優しさにカイが知らず頬を緩めるのも束の間。

残されたのは、扉に隔てられた女とカイ。

張り詰めた空気の糸を爪弾くように、うっすら女が微笑んだ。

「お部屋に入っても、宜しいかしら？」

「……どうぞ」

無表情を装って、カイは扉を押さえ彼女の招いた。

ぬるい空気のなかの声は、やけに拗ねたように響く。

対するのは、美しく微笑む年上の女。

役者が違う　勝てない。

なぜだかそう、感じた。

焦りに、視界が狭くなる。

身を焦がすのは、今の状況にそぐわないほどの危機感。

なにが、こんなに体の底を焦がすのかわからない。でも、

この存在は決して己とは相容れないもの。

殺される？

「座っても、宜しくて？」

「ご勝手に」

カイが座るときは必ずこの世の終わりのような声で鳴く椅子に、音も立てず優雅に女は腰掛けた。

カイはといえは、窓まで足早に近付き、棧に体重を乗せる。すぐに、逃げられるように。

馴染みになった軋みが、やけに大きく感じた。

「そんなに警戒しないで。可愛らしい子に嫌われるのはわたくし、哀しいわ」

「……」

黙ったまま、カイは女を睨み付ける。

「……用件は？」

「そうね、その前に」

ふわり、と女が立ちあがる。

避ける暇もなくさっと、女の白い指がカイの頭のうえの麻布を払った。

「なッ！」

ゆらり、と窓の外に生成りの色が舞う。

それを追うように窓を飛び出しかけたカイの腕を、驚くべき速さで女が掴んだ。

ぴり、と電流のような痛みが腕に伝わってくる。

「ほら、逃げないで。わたくし、あなたに頼みがあつてきたの。逃げるのなら、この手をもいで、足を斬って、どこにも行けないようにしてしまふかもしれないわ。綺麗なパール色の鳥を、一度は飼って見たかったのよ」

微笑んで、でも腕は外さない。食い込んでくる指と爪に、カイは女の薄紗越しの顔を睨み付けた。

「なにが、頼みだよ？ ふざけんな！ ひとにものを頼むんなら、その顔隠しを取りやがれ！！」

自由な腕を、力任せに女の顔に叩き付ける。

軽やかに、女はやけくそじみたカイの攻撃を避けた。

ぎちり、と更にカイを捕らえる指に力がこもる。女の深紅に染めた爪がカイの皮膚を裂き、赤い紅い血がひとすじ、滴った。

「コンのッ……怪力ババアッ！！」

「……綺麗な紅ね。あなた方の血の色も、わたくしたちと同じ。いいえ、わたくしたちの血とは違う、濁りのない色。羨ましいわ」

「血の色なんざ、誰でも同じだろ？！ 濁っているだろ？ そんな言葉で自分たちを飾って、選民意識持ちやがって！ ふざけんな！」

低く、カイは唸った。

ちり、と女の薄紗が熱を帯びる。

はっと、見開かれた女の瞳。

それを心地良く感じながら、カイは凝った神力を放つ。

ぱっと、薄紗が火の粉を散らし燃え上がった。

「燃えちまえ……灰になっちまえよッ！！」

炎のかたちを得た神力と共に、ぐっと腹の底からせりあがってくるのは堪え難い高揚。喉が潰れるまで叫ぶような。

しかし 残酷な歓喜は、一瞬のこと。

今度は、カイが怯む番だった。

「全く……」

炎の向こうで、女が、いつそう艶やかに微笑む。

「随分と、やんちゃな子なこと……でもね、生憎、わたくしは炎を怖いと思ったことはないのよ。努力は、認めてあげるけれど」

あなたの血族も、こんな風に強情で、可愛らしい子なのかしら……？

透ける朱の焰を払って、細められた瞳。

その色が誰かと同じ色だと、ようやくカイは気付いた。

「あの塔が、蒼水神殿の……ひいてはこの蒼都タレジュの中心にあたる奥宮です。そして、この場所は北の院（アドラ）と呼ばれています。奥宮から見ればその名の通り北の位置を示し、背後の市街は北地区 どちらかというならば商人たちの街、ですね。同じように、南地区は歓楽街、東地区は警邏・行政を司る地区です」

窓辺に座り漆黒の髪を風になぶられるまま、アルヴィスは滑らかな指で窓の外を指し示す。

その横顔は穏やかで、通った鼻筋も光を透す蒼の瞳も睫毛すらも綺麗で、リンカは見惚れる自分を律するのにいくらかの努力が必要になる。いつも。

「……四位、って言ってたよね。それに、四院って。北、南、東、それじゃあ西は？ そもそも、タレジュは大陸の西の都。西が一番大切なんじゃないの？」

だらしなく寝台の上で片膝を抱え、抱えた膝のうえに顎を乗せた姿でリンカは問い返す。

子供じみた問い方だと、自分でもなんとなく恥ずかしくなる。

それでもわからないことをそのままにしておきたくなくて、リンカは日毎夜毎訪れるアルヴィスに、たわいもない問いをぶつけている。

アルヴィスはそれを馬鹿にせず、ひとつひとつ丁寧に解説を加える。

ひとつひとつの問いが、リンカの記憶を刺激することはない。

ただ、アルヴィスと過ごす時間に、なんとなくしに体の奥底を揺らされる気がして……やめられない。

知ッテハイケナイヨ。

そう囁く誰かが、存在することを気付かないわけではな
いけれど……。

まやかしても優しい時間を、リンカは過ごしている。

ただ 怖い。

目を逸らす自分になることも、全てを思い出すことも
この男に関わるなにかを、想う自分も。

「よく、気が付きましたね」

にこりと微笑んで、アルヴィスはゆっくりと頷く。

もう見慣れてしまった、実のない笑み。

綺麗だけど、こんなものには心は揺れない。

「ひとをおだてるのはやめてくれない？ あんたがなに考
えているのか知らないけど、すっごい不愉快」

「それは失礼」

口許を、滑らかに整えられた指で押さえる。

何度も見た、アルヴィスの癖。

同じ動きを繰り返す、香油を塗りこんで、揉み解して、
きつと何人もの間人が手をかけているに違いない手。

でも、その手のひらには何度も何度も豆が潰れた痕が
残っている。剣術を極めた人間なら必ず刻み込んでいる、
修練の証だ。

どうしようもないほど作為に満ちた綺麗な微笑よりも、
そんなささやかな『彼』を見付ける方が、よっぽど応える。

そんな自分が、リンカにはわからない。

「西は女神を奉り、死者を慰める街です」

「……死者と女神は、いつしよくたなわけ？ それって、
随分……大雑把で乱暴じゃない？」

「確かに、そうも思えますね。生者の域を越えたものを慰
めるのが西院（レエル）と……西位といえは、納得してい
ただけですか？」

「納得、っていうよりも……まあ、なんとなく」

「この蒼都は大陸全土から見れば、西の外れ。さしたる産
業もなく、女神を詣でる巡礼が落としていく財で暮らして
いる城市です。しかも、周囲は砂砂漠に囲まれている。水
の湧くはずのないこんな砂の大地に水の恵みがあるのは女
神の加護と四位、そのなかでも西位の祈りのちからが大き
いのです。女神に変わらず捧げられる祈りが、女神の加護
を与えてくれる。年に一度行われる祭儀も、西位が主に執
り行うもの。だからこそ、最も一族のなかで神力の強い、
血の濃い者が選ばれます。他の四位はまあ、添え物のよう
なものです」

そう言って笑むアルヴィスの顔にかすかな曇りを感じて、リンカは怪訝に思う。

「いまの、西位も？」

「え？」

ふっと、夢から覚めたようにアルヴィスの瞳が重なる。なんの恣意もない、素のままの蒼に、どうしようもなく頬が熱くなる。

「え、じゃないわよ！ 聞いてなかったの！？ いまの西位もそんなご立派な奴なのかって、あたしは訊いているの！」

乱暴に言い捨てて、そっぽを向く。

自分の変調を悟られやしまいか。そんなリンカの動揺が、アルヴィスから目を逸らさせてしまった。

蒼の空に向けられる、蒼の瞳の彩。

ささやかな それでも、大切な変化を、リンカは取りこぼしてしまった。

「ええ、とても、綺麗で今までの一族の歴史のなかでも随一の神力を持つと言われる、希代の祭司です。美しくて賢くて優しい、わたしの自慢の従姉です」

「ふうん」

面白くない。

そんな風を感じる自分。

それがふわりとリンカの肩を抱いて、消えていく。

どんな感情もリンカには掴めず、伸ばした指先を掠めて、よそよそしい感触だけを残して消えていく。

怖い。

どんな感情よりも濃く、強く、残るのは恐怖。

指先からさらさらと、砂のように消えていきそつな予感。

怖い。

目の前がふいに、深い深い紅に染まる。

「あ……」

「リンカ？」

「……なんでも、ない」

両の腕で己を抱き締めて、リンカは頑是無い子供のように首を振る。

「なんでもない、などという顔ではないでしょう」

「なんでもないのッ！ 放っておいて……！」

ひりついた心をすり減らすように、リンカは叫ぶ。叫んで、叫んだ声も感情さえもすぐに己から遠いものになるのを、自覚する。

期限が来た。壊れた砂人形にかけられた魔法が、解ける時間。

己が 消えていく。

「いや……」

首がもげそうなほど髪を振り乱して、ぱさり、と腕のなかに落とす。

なにを見ても怖くて、反面なにを見ても虚ろ。感情はどこまでも肌近く、どこまでも遠い。

変わってゆく己。そして、内側から身体を喰い破るのは、吸い込まれるような暗闇 虚無とでも言つべきもの。

「怖い……」

髪が抜けるほど強く指に絡めて、リンカは低くうめく。

「怖いよ……わたし……」

どうなるの……？

憎しみも愛情も、無理に駈り立ててきた復讐の念も、全てが胸のなかの穴に消えていく。

『復讐』？

リンカのなかの、褪せない問い。

あたしは、なんのために、どんな『復讐』をしようとしていたの？

なにを、取り戻すために？

数秒前のリンカでさえ、いまのリンカとは異なる生き物。ささやかな想いさえも、淡く嫌な違和感に遮られ同化するとはできない。

ならば、二年も前 隠れ里で暮らしていた頃のリンカなど、他人よりもなお見知らぬ存在だ。

それでも突き動かされるほどの、激しい想いはどこから生まれてきた？

『彼女』は、なにを『復讐』と思っていた？

そんな単純な疑問でさえ、晴れることはない。

赤い紅い夢の欠片。それに縋って、あの男を殺すことだけを『復讐』と、そう無理に心を塗り固めここまで来たけれど、それは真実正しいことだったのか。

あたしの本当の希みは、なに？

全ては、混沌の渦に。

かたかたと歯を鳴らし、首を振り続けるリンカの身体を、そっと、優しい腕が抱き締めたことさえ、リンカは気付くことができなかつた。

そして降り積もるのは、とけない謎。

あたしの傍にいるこのひとは、いったい、だあれ…

…？

細かく編み込み、紅い布と金の簪で飾ったリンカの髪。ふわりと、結び上げたときと同じように、繊細な指が髪をほぐく。すると、砂色の髪がアルヴィスの指先を滑り、肩に落ちる。

柔らかく、髪を、肩を滑る指。

韻を踏むように、優しく優しく滑っていく。

かたく閉じた瞼を上げて、そつと、息遣いさえも窺えるほど近い、アルヴィスの顔を見上げる。

眉を顰め、堪えるように細められた蒼の瞳。

視界が暗い。

窓の外の空は蒼の色彩を失い、ただ紫紺にたゆたうのみ。手の届く蒼は、アルヴィスの瞳のなかだけだ。

蒼に、吸い込まれる。

溶けていく。

激情の波に翻弄された後のけだるさが体を支配していて、なにも考えられない。

だからリンカは、自然に　ただ、思うままに、間近の薄い唇に乾いた唇を寄せた。

自分の底で、誰かが笑っている。

嘲るように、哀れむように　安堵するように。

細かな泡粒のような笑い声を、零し続けている。

くすくす、くすくす。

囁かれ続ける、誰かの声。

……アイシテル……。

遠く、聞き取れずにただ、細く哀しく響く。

その音色に揺らされながら、リンカはアルヴィスの腕のなかの水に、溺れた。

この城市に雨が降らなくなってから、もつどのくらいになるのかしら。

安っぽい、宿屋の一室。

そんな風に、その女は切り出した。

もの憂げな顔は、真珠色。

透き通るような肌、というものを、カイは初めて見た。

カイが最も愛した肌は、砂と土と太陽を全身で受け止めた褐色をしていた。

カイが最も気に入っていた瞳は、闇も光も風も水も炎さえも受け入れた多色の瞳。

目の前にいる女とは、なにかもが違う。

美しいかどうかは別として、客観的に見ると反論の余地もなく美しいが、そう素直に認めるにはこの女への悪感情が濃くなりすぎている。それでも、この女には惹かれるものがある、とカイは認めざるを得なかった。同じほどに、反発する想いも。

真珠色を縁取る緩く波打つ漆黒の髪は蒼みを帯び、蒼の瞳の神秘性により深みを与えていた。

水の蒼を、ごく当然に纏う美女。

腹が立つほどに強い、水の女神の化身。女神の仕える女。

名前もなにも訊かずとも、それだけはわかる。肌に焦げ付くような、神力の波動と共に。

「こんな砂漠のご真ん中に、雨なんぞ降るかよ」

腕に滲む血を舐めて、カイは女から顔を背け吐き捨てる。頬を撫でていくのはなるほど、乾き切り痛いほどの風だ。

ただ触れるだけで、心までかさついていく。

「その『砂漠のご真ん中』に雨の恵みを垂れるのが、女神の神力というもの」

にこり、とそれこそ女神めいた微笑を向け、女が歌う。

「でも、この城市に雨はもう二度と降らない。女神の恵みは、二度と与えられない」

するりと、空を舞うように伸ばされたしなやかな腕。その滑らかな動きに、しばし、カイは目を奪われた。

この女の意味に乘せられ、呑み込まれていく。

それを悔しく思いながら、どこか心地良く感じる自分がいる。

「『女神』は在なくなったの。わたくしたちを、見捨てた。だからわたくしは、他の神に祈るわ」

わたくしの神になって。

そつとカイの乾いた唇に触れ、女は囁いた。

『祈り』や『願い』のような受動的な情弱さではなく、ただ物狂おしい熱を蒼の瞳に宿して。

熱に、揺らされる。

伏せた睫毛を擦り抜け、絶え間ない刺激を与えてくるアルヴィスの肩越しに、幻影が見える。

ゆらゆらと、揺らぐ熱はあんなにも蒼い瞳から生まれて
いるのに、印象は深紅。

身体の裡と皮膚の外から紅に染められて、リンカは繰り返し、夢に囚われてゆく。

「リンカ……」

生身のリンカに向けて囁かれる掠れた呼び声も、肌をつ
いばむ口付けも、もっと直接的な快樂さえも、リンカを現
実に繋ぎ止めやしない。むしろ、夢に墮ちるリンカの重石
になるだけ。

夢のなかの『リンカ』と、溶け合い絡み合う感情ゆえに。

「リンカ……」

遠い声と裡に響く声が、重なり合う。

綺麗な声。低い声。掠れた声。

僅かなずれさえもいつのまにか消え、ふたつの音色はひ
とつになる。

悪夢は、現実の地平に引き寄せられる。

「あつ、い……?」

目の前に広がる、透ける紅。なにかもを侵蝕するかの
ように、伸びるのは焔。

漆黒の髪が揺れて、懐かしい顔が振り返る。

なぜ、気付かぬふりなどできたのか。

なぜ、忘れたふりなどできたのか。

こんなにも、記憶の残滓でさえ鮮やかなのに。

愚かな己を笑い、リンカは口許を歪めた。

「リンカ？」

蒼い瞳が熱を裂いて、訝しげに曇る。

その唇に、リンカは噛み付くように口付けた。

振り向いた男は、蒼い瞳を細め、嘲っていた。

そして、リンカは喉が裂け、肺が痛むほどに叫ぶ。

アーヴ……アルヴィス、と。

苦過ぎる記憶の蓋が、いとも容易く開く。

開け放たれたそこからまず湧き出るのは、昏い闇。

淡い光放つものは底に漂い、手を伸ばさなければ届かな
い。

指先を掠めて、すり抜けてゆく。

光を知らず闇色に、心が染まる。

ふわりと、乾いた風に寝台の薄紗が揺れる。
傍らには、微かな寝息。

いつか止まってしまうのではないか。
そう恐れるほどの弱々しさで、アルヴィスは眠っている。
死の静穏と、背中合わせの安らかさ。

瞳を開けていたときはひどく精気に満ちふてぶてしいほどの余裕を帯びていた青年が、ひどく頼りなく見える。蒼い月光を弾く顔はひどく痩せ、それは先ほどまで重ねていた身体も同じ。鍛え上げた筋肉も、じりじりと削げ落ちているに違いない。

夢のなかよりも、細く研ぎ澄まされている。乱暴に触れたら、壊れてしまいそう。
遠くに、痛みが滲む。

そして、どろどろとした感情も。

微笑を、覚えている。白い頬に飛んだ、赤黒い色彩も。
触れてきた指の、生暖かいぬめりも。

この手が血に汚れた長剣を奮い、この指がリンカの額の響銘石を抉り取った。リンカのなけなしの一族の証を、奪い取った。

宵闇は深く、静か過ぎてリンカは自分の思考を止められない。
転がってゆく。

それが、自分の想いに添っているのか　それすらもわからずに。

羽織った衣の感触も、肌に残る微かな熱も、全てが薄紗越しに触れるように実感が無い。

ふわり、と長い髪を揺らし、リンカは覚束ない足取りで寝台を降りた。

夢に溺れ、萎えた足に、脱ぎ捨てられた深紅と蒼色が絡みつく。

纏れたアルヴィスの蒼衣に埋まり、転がっているのはアルヴィスがいつも携えていた宝刀。

高位祭司が持つには不似合いな、傷物のオパールを嵌めた白銀の剣。罫を刻み傷付いた飾りを得た、曇りを赦さぬ刃が、墜落し続けるリンカの行き付く果て。

玩具を扱う子供のような危うさでそれを引き寄せてリンカは、無造作に刃を振り翳した。

眠り続けるアルヴィスの、胸元に向けて。

肌の真珠に深紅の彩りは、さぞ似合うことだろう。

残酷な想像に、知らずリンカの口許に笑みが浮かぶ。

『ッー!!』

誰かが、叫んでいる。

聞こえない声で、届かない叫びを。切ないほどのちからを込めて。

しかし、硝子越しの音が空気を揺らさないように、その声は遮られ、翳むだけ。

べったりと塗り重ねられるのは明確過ぎるほど明確な、殺意。

殺してやる……いや、殺さなければ……。

あたしがここにいるのは、きつと、そのためだったはず。

現実から剥離し夢に囚われた体のなかで、そんな言葉だけがからからと響いていた。

ぴくん、と弾かれたようにカイの肩が揺れた。

「どうしたの……?」

微かに眉を寄せて、女が問いかけてくる。それを無視し、カイはしなだれかかる柔らかな肢体を放り出した。

絡み付く腕を邪険に解き、皺になった寝台の敷布を引きずり出し、引き裂き始める。

「なッ!？」

女が息を飲むのを、カイはすっぱりと黙殺した。

乱暴に布片を目立ちすぎる砂色の髪に巻き付け、窓から飛び出す。

ふわり、となびく襜褕が吹く風を教える。

それに混じる、ちいさなちいさな叫びも。

聞こえたのだ。

ささやかな……でも、確かな声。

燐火の声だった。誰を呼んでいても、それがカイの名でなくとも、同じ血が響き合い揺らぎ、カイに教えてくれる。

「ここは三階ッ!？」

叫んだ女の声は、夜風にかき消された。

あつという間に、少年の姿が路地に消える。

それを見届け、女は濡れた紅の唇を歪めつつそりと呟いた。

「全く……可愛らしいほど単純なこと」

乱れた髪を揺らす風に……確かに、同族の血の匂いを女は感じ取る。

緩やかに波打つ髪をかきあげ、呟いた口許には、ゆつたりとした笑み。

それでこそ、いくらでも利用できる。

「わたくしは本当は、あのひとによく似ている……。己の目的こそ、最も重要だと思い決めている身勝手さが」

それこそが己のいちばん愛おしいところだと、ひび割れた水晶めいた美しさの女は、独り微笑んだ。

「定まった滅びを黙して待つなどという悠長な真似、わたくしにはできないわ。ならばいっそ、新しい神でも掲げ、古き城市を跡形もなく滅ぼしてみましようか」

その感触を、一生忘れない。

常ならば決して触れることのない肌のしたを潜っていく、弱った刃。

最初は時が止まったようにゆっくりと　時が経つに連れて満たされた杯から水が零れるように溢れ出す、鮮血。

そして、匂い。

とろりと空気に溶けるように流れる血臭は、最後の破片だった。

すなわち　深紅の夢の破片。

赤い紅い血の匂いによって夢は夢として完成し、現実とは全く相容れないものとして隔絶される。

夢と現実の狭間で、リンカは全てを取り戻す。

感情も想いも記憶も　彼女のものであった、全てを。

急速に収束し、ぐるぐると回る紅い刻を、低い声が静かに裂いた。

「なぜ、外したのです？」

傷物の石を嵌め込んだ、飾り物の刃。

鞘の代わりにそれが収まったのは、胸の中央ではなく肩。

ぬるりとした血の感触に冷えた心が、不可解な感情に揺れる。

殺せなかったという安堵と、殺してやれなかったという悔い。

「なぜ、この心臓を抉り、過去の恨みを晴らさなかったのですか？」

「なぜ？」

驚くほど冷たい指が、ぎゅちりと柄を握り締めた甲に触れ、白くなつた指に触れ、萎えた刃に触れる。

ぬくみは、鮮血。

響きは、柄に。

ようやく、リンカは己が掴んだ物の正体を知る。

そんなものに揺れるひまは、ありはしなかったけれど。

「そんなのは、決まってる。殺すことなんて、できないから」

掠れた声が、ようやっと喉から搾り出される。

痛みを堪えるように片目を細めるアルヴィスよりも、よほどひどい声だ。

リンカが唇を噛み締める間に、ゆっくりと、アルヴィスは身体を起こす。

ずるりと、抜かれた刃。血色の神器。

なにかの魔法のように、たっぷりと溢れ出す鮮血に、ぐらりと目の前が傾いた。

血が、流れる。

流れて流れて　生きてる。

「殺してなんて、やらないから」

寝台にぬるい血の泉をつくるアルヴィスの身体を、リンカはふわりと抱き締めた。

ぎゅうと瞑った目の裏が、深紅に染まる。

薄紅の衣が、深紅に染まる。

どこまでも、あかが付き纏う。

キスをして。

抱き締めて。

そして　殺して。

生き続ける限り続く苦しみならば、根元から絶やして欲しい。

自分のなかに流れる忌々しくも輝かしい女神の血は、逃げることを赦さない。だから、この血ごと身体ごと消し去って欲しい。

二年前、砂漠の果ての隠れ里でリンカが出逢い、愛した青年の願いは、ただそれだけ。

だから、リンカの『復讐』は、ただひとつ。

「ずっとずっと、生きればいい。這い擦って、見える果てを否定して、苦しんで苦しんで、生きればいい」

苦しんで、哀しんで、壊れるまで生きて生きて　生き続けて欲しい。

消えないで。

この男の苦しみの源なんて知らない。そんなもの、触らせてもらえない。だから、ただ祈る。

「それは……あなたを傷付けたわたしへの、罰なのですか？」

アルヴィスの、諦めじみた空虚な笑みを含んだ言葉。

リンカは、水面に映る細波のように、透き通った笑みを浮かべた。

「なにそれ」

「罰が、欲しいんです。痛みを予期して恐れるより、いつそ始めから傷を負ったほうがいい。そう思いませんか？」

「あんたは、逃げてる」

なにも話さずにいることができずに、リンカは責めるようにアルヴィスを上目遣いに見遣った。

自分の呟く正論めいた言葉が、なんの役にも立たないことは吐き出した瞬間にも分かっている。

でも、なにもできずなにもしゃべれずただぼんやりとアルヴィスの傷を眺めるだけの女であることを赦せるほど、リンカはなにもかもを達観することができなかった。

ただの邪魔でも、無駄なあがきでも、呟かずにいられなかった。

返ってくるのがただ、胸に淋しいばかりの笑みでも。

「そのようなことは、聞かずとも」

アルヴィスの胸には、あの日の婆さまの胸よりも深く大きな穴が空いている。

どんなに唇で、腕で塞いでも、塞ぐことはできない。

リンカには、なにもできない。

ただ、泣いてしまえそう、だ。

「罰なんて、知らない。ただの、あたしの『復讐』だから。あんたの苦しみを見て、あたしが笑ってやる。笑い死ぬくらい、笑ってやるわ」

だから、生きればいい。

それがただの言い訳であることは、わかっている。

ただ、リンカは死んで欲しくないのだ。

彼がどんなに苦しもうが、目の前から消えて欲しくないのだ。

アルヴィスが救われるより己の願いをあたためるなんて、間違っている。

でも、間違っているのはお互い様だから。

「それは、あなたに相応しい『復讐』ですね」

「あたしに？」

「ええ……死と血の匂いよりも、生と太陽の匂いのほうが、あなたに似合っている」

いいや……血の鮮やかな彩りだけは、リンカに哀し

いほどよく似合っている。わたし……いや、俺が俺だけのちからでリンカに与えられる、たったひとつの飾りだな。昔のままの口調で吹き、ふっと、風が吹くように頼りなく、アルヴィスが笑う。

泣きそうに清んで、綺麗で、綺麗で、もう二度と見たくはない微笑だった。

白い包帯を、幾重にも幾重にも巻き付ける。

寝台には、いまだ広がったままの深紅の染み。

放り捨てられたままの、血塗れた刃とぬるみを帯びた傷物のオパール。

手のなかには、長く垂れ下がる布地。

髪の毛にほのかにかかるアルヴィスの吐息。

リンカはなにも話すことができずに、ただ近付くと粗い布目を見つめ、リンカの貫いたアルヴィスの肩に包帯を重ね続けている。

丁寧に、丁寧に。

この単調な作業が終わったとき、なにをすればいいのか、なにを考えていいのか、わからない。

だから、窒息しそうな空気に敢えて呼吸さえも詰めて、不器用に指を動かし続ける。

「いつかと……」

ちいさく、零された言葉を聞き落として、リンカはふと顔を上げた。

声も響きも、現実から遠くて……遠くあって欲しくて、ひどく鈍い。

瞳の蒼だけがリンカに近くて、頬が熱くなる。

「なに？」

一気に上った血を沈めるように、せいぜい、不機嫌に顔を歪めてみせる。

「いつかと、丁度逆の立場だと思って」

ふわりと、全てお見通しだと言わんばかりに細められた瞳。

滑らかな指がもう緩んでしまった包帯をひっぱって、笑う。

「俺のほうが、だいぶ上手だけれど」

するりと、リンカの四半刻分の苦勞が、容易く無になつてアルヴィスの膝に落ちた。

しわが寄りべらべらになった包帯のなれのはては、リンカの心も知らずひらついている。

「悪かったわね……」

意趣返しとばかりに包帯を引き絞って、リンカは低く唸る。

「つつ」

痛みを堪え噛み締められた薄い唇に、ほんのすこしずつとする。

不自然に詰められた息が、かすかに通ってゆく。

時が、緩んで逆さに流れてゆく。

二年前は少年じみた匂いを纏っていたアルヴィスの顔立ちが冷たく冴えても、リンカの背が伸び髪が流れても、リンカはそう錯覚するだけの懐かしさだけを選び、引き寄せた。

「痛いよ、リン」

「ごめんね、ヘタクソだから」

「本当に」

「じゃあ自分でやりなさいよ」

「下手でもないよりましだ。自分で自分の肩を治療するのは、無理だよ」

ふわふわと、失礼なことを言ってアルヴィスが微笑む。

刺のない辛辣な言葉に宿る、確かな優しさはリンカを慰撫すると同時に、不安にさせもする。

『最後』や、『別れ』。

そんな単語が勝手に浮かんできて、リンカは空気を止めずに吐き捨てる。

「下手は余計。黙っていなさいよ」

くすくすと、笑い声が肌に触れる。

粗い包帯の目地が擦れて、指が痛い。

宵闇に浮かぶほのかな灯りが、大気を濁し、感覚を済ませてゆく。

気付きたくないことを、気付かされる。

『予感』や、『予兆』。

目の前にぶわりと広がる、血と炎の深紅。

婆さまのばかりと開いたままの濁ったオパールと、

胸の赤黒い穴。

「すまない」

手持ち無沙汰な指先にリンカの髪を絡め、アルヴィスが呟く。

いつのまにか胡散臭い慇懃さが、口調から消えている。

素直さがなにやら怖くて、なにを考えているのかわからなくて、わかりたくない。

細かく髪を編んでゆく指の繊細な動きを、いつまでも感じたい。

「このことに関しては、すまなくなんてない。お互いさまだからって言ってるじゃない」

むしろ、アルヴィスの傷に触れるのは嬉しい。

いくら肉体の傷に触れても、心の傷には近付くことさえできない。その、代償のように。

そんな想いが、勝手に瞳に滲む。

「そっだね」

くすりと、零れる笑い声。

困ったような響き。

こころ揺らされず包帯巻きに必死なふりをするリンカの頭上に、降り注ぐ言葉。

「リンカを助けた代わりに、俺をリンカが癒す。これで、この城市での貸し借りは全て清算された、というわけだ。なら、俺の言うことは決まっているね」

いますぐここから、消えて欲しい。

髪に唇を寄せ、アルヴィスは瞳を閉じて囁く。

突然の、台詞。

アルヴィスが煎じたまずい薬酒のように苦味はじわじわともどかしく染みて、こころに届くには一呼吸、必要だった。

「なによ……それ？」

きつと自分は、ひどく傷付いた顔をしている。

そんな予感に更に傷付いて、リンカはアルヴィスを見返した。

指先から滑り落ちた、包帯の粗い布目。

そんなささやかな感触が、ひどく鮮明に残る。

至近距離から見上げるアルヴィスの目は薄紗でも透したように、曖昧に濁っていた。

がらりと口調を変えて、アルヴィスは告げる。

「理由は、わざわざ話さねばならないのか？ 不浄の民の

長妃（おさひめ）、リンカ・イン・サリー」

投げ付けられた言葉の礫に、確かな痛み。

『長妃』 その尊称をリンカがどれだけ忌み嫌っていたか知っているからこそ吐ける言葉に、胸が引き千切れそうになる。

アルヴィスは、リンカを故意に傷付けようとしているの

だ。

「あたしは、長妃なんかじゃない！ 長妃なんかにはならない！」

叫んだ言葉に、自分が引き裂かれる。

それは、自分によく似た少年を、捨てるという意味さえも含んでいるから。

「では、穢れし魔神の末裔であり、最も濃い穢れを受け継ぎし不浄の小娘よ。すみやかにこの城市から立ち去るがいい」

曖昧な笑顔の仮面を捨て、冷たい冷たい仮面を付けたアルヴィス。

初めて見た仮面は見慣れた 見飽きた仮面と違い、継ぎ目も隙間もうまく掴めない。

本当に、嘲られている。そう、考えてしまうほど。

いや、真実、自分は蔑まれているのか……？

ぱちりと目の前で引かれた線にリンカはかすかな動揺と同時に、御しきれない怒りを覚えた。

「あたしが、穢れだって……？ ああ、穢れで結構。あたしじゃない人間がなんとほざこうが、あたしの存在に変わりはないわ。でもね、アルヴィス。じゃああなたは？ その穢れの里のその身を偽って潜り込み、穢れの民さえも忌むべき血の穢れを浴びたのは、どこの誰だというの？！」

「穢れの民を駆逐しただけのこと、誰に咎められる謂れもない」

ふっと、口許に笑みが歪む。

それを信じらない想いで見詰めながら、ぶるぶると震える両手で血に染まった敷布を握り締めた。

「あんたを、殺すべきだった？」

誰に聞かせるともなく、呟いた言葉。

仮面の継ぎ目が少しだけ、緩み また、元に戻るのを、リンカははつきりと見て取った。

「アーヴ……」

久方ぶりに唇に乗せた、懐かしい名前。

この里にいるあんたは、外のあんたとか違う人間だから、あたしがあんたに新しい呼び名をあげるわ。

二年前の自分の台詞さえ、きちんと思い出せる。

「

ヤット、呼ンデクレタ。

そう薄い唇が震えたのは、錯覚だったのか。

確かめる時間は、リンカには残されてはいなかった。

『立派なお芝居だね、アル』

そんな柔らかな声が、部屋に響く。

「きゃあぁッ！」

奇妙に歪んだ間を持って、飛び出した悲鳴。

血の染みを残した、白絹の敷布。

そこからするりと、現実感もなく伸びているのは 白

い白い、綺麗な手。

手首から指先までが、唐突に深紅の染みから生えていた。

「タレジュ・セラムファースッ！」

逼迫した、アルヴィスの叫び。

「や……ッ」

ただ怯えるだけしかできない子供のような、リンカの喘ぎ。

『掴まえた……新しい、我らの救いの姫』

楽しそうに囁く、手の主らしき男の声。

その指はしっかりと、リンカの手首を戒めていた。

冷たい指だった。

触れたところから、徐々に薄く氷が張っていくような。

骨が本当に入っているのか、それさえ疑わしい、魚のよ

うに滑らかな線の華奢な指。

ぐいぐいと、「こちらの腕をまるで燭台かなにかのようにつ、

締め付けてくる。

「やッ……これは、界渡りの技!? こんなッ」

こんなほんのすこしの液体（みず）で、『渡る』ことができ

きる人間がいる……!?

里の人間のなかでもほんの一握り リンカの兄のカイ

が、操っていた術。

目の前の炎から遠くに存在する炎まで、物体を移動させ

る神力。

これをすると、ひどく消耗するんだぞ。

そうぼやきながら、リンカを里の端から端まで渡してく

れた。

炎遣いのカイだから、火炎。

じゃあ、水遣いなら水で渡すことができる?

当然。いや……かなりの神力が必要だな。

カイが呟いた言葉に、勝手に傷付きもした。

それと、媒介。ほんの少しの炎では、怖くて渡せな

い。途中で途切れたら……考えたくもねえな。

そう笑って担いできた、家中の燭台。

カイの言葉が間違っていたことなんてない。

なら この目の前に不気味に伸びた、ほんのすこしの血の雫を伝って渡ってきた腕の主は、どれほどの神力を持っているのか。

「タレジュ・セレムファース！ なんの真似です、これは!？」

『なんの真似、ね……?』

くすくすと、からかうように笑う声。

『こちらこそ、訊きたいね。なんの真似か、と……タレ

ジュ・アルヴィス。いと貴き北位殿』

「この女性は、わたしの客人です。無礼は、東位殿でも赦しません」

『客人、ね。鍵をかけた部屋で歓待するような、そんな客人。そして……非常識なほどの神力を纏った』

あたしのどこに、神力があるっていうのよ!？」

反論は、口に出すことが出来ずに澀む。

ぎちぎちと、締めつけられる腕が痛い。それ以上に、この声の主が怖い。

アルヴィスの声を、ほんのすこし高くしたような声。声だけは嫌いじゃない。響きのいい、滑らかな音色。なのに

ひどく、背筋が寒くなるのだ。

思い出すのは昔一度だけ逢ったことのある 母親の、世界を離れた笑い声。ひとが生身のまま界を渡るときに発する、崩壊の音だ。

その悪寒を裏付けるように、追い詰められたアルヴィスの顔。

リンカにも、その不気味な腕にも触れることができずに、さまよったままの腕。

『てつきり、わたしへの贈り物だと思っていたよ。わたしの希みを、どこまでも理解してくれているアルだから』

恐ろしく耳障りのいい声が、無造作に毒を垂れ流す。

『わたしのために、恐れ多くも健啖家な女神への供物を、狩ってきてくれたんだろう?』

ぐい、と腕が引かれていく。生じたときと同じ不自然な自然さで、敷布に溶けていく腕。指先が血に沈みそうな段になって、リンカはその無防備な真珠色の肌に爪を立てた。

「ひとを……無視して話を進めるんじゃないわよー」

髪の毛から、ふわりとひかるのは神力。

だが、それはなんの現象も引き寄せない。

凝ることもなく、ただ羽根のように散ってゆくだけだ。

里で『幻影遣い』と嘲られた神力の役立たず振りは、所詮いまま変わらない。こんなに近くに響銘石を取り戻してさえ、リンカは自分の身すら護れない。

だけど。

無力を理由に流されるのは、死んでも嫌だ！

「このッ！ 離しなさいよ馬鹿ッ！」

血が滴り落ちるほど爪で抉り、もう片方の拳で容赦なく叩いているのに、白い手の力は少しも緩まない。それどころか、ずるずるとリンカのほう引きずられ、ずぶずぶと深紅の染みに潜っている。

もう、だめかも……。

そう諦め掛けた瞬間、目の端でなにかが動いた。

たん、と伝わってくる音と軽い振動。

「アーヴ！」

寝台の血色めがけ、己の血に汚れたままの宝剣を叩きこんだのは、アルヴィスの腕だった。

「罪には罰を……そのことはよく弁えています、タレジュ・セレムファース。だけれども、彼女は、駄目です。

代わりにこの血肉を削るうとも、彼女を渡すことはできません。わたしのなで贖うことになるうとも」

『アル、お前がそんな』

「女神よ……我らが水女神タレジュよ。北の位を賜りし御身が下僕、アルヴィス・アル・アダイスが願ひ奉る。我に神力（ちから）を。我が 敵を、打ち砕く神力（マナ）を！」

憤りすれすれの訝しみを遮って、アルヴィスは真言（マナ）を唱え始める。

最後は、掠れ、聞き取れなくなってしまう。己の言葉に傷付き、痛みを堪えるように声はくぐもっていく。

『そんな不甲斐ない様で、わたしに逆らっても無駄だよ。お前はいつも、吐く言葉ほど確固としてはない。裏切りは、いつも半端だ。そんな逆らい様しかないのなら、いつそ、心を潰して道具になってしまえばいいものを』

白い腕の主が、残酷に言い放つ。その言葉どおり、容赦なく食い込む指に、リンカは顔を顰めた。

でも、そんな痛みが苦しいわけではない。

「泣かないで……ううん、泣いてよ。我慢しないでよ。お

願いだから」

泣きたいのに、泣けないアルヴィス。歯を食い縛るだけの、昔と少しも変わらない、変われなかったアルヴィス。アルヴィスの肩に頬を摺り寄せて、リンカは囁いた。二年の月日の内に伸びた腕を伸ばして、抱き寄せたいのに、両の手は捕らわれている。そのことが、なによりも腹立たしくなった。

「アーヴを傷つけないで。傷つけておいて、わないで。そして、邪魔をしないで！」

叫んだ瞬間、なにかが、リンカの身体から溢れた。

ふわり、と長い髪がなびき、金の光彩に包まれる。瞳が、金に染まる。

続くのは、小さな杯から大海ほどの水が湧き出すような、在り得ない神力の奔流。

彼女のものではなく……彼女を護るアルヴィスという器から、その器の値を超え、弾け飛ぶ。

「四女神の、神力……」

聞き慣れた声が、胸に落ちる。

それを、不思議な心地で聴いていた。

なにを、言っているのか。あたしに、なんの神力もあるはずがないのに。

哀しい気持ちで、リンカは微笑った。

少女は、知らない。

三女神と一柱の魔神の神力は、反発し合い、溶け合うことはない。溶け合うことはないと、そう信じられていた。

唯一の誤算は、少女。

幻影とかたちのみ現す彼女の神力はどの女神の神力でもなく、またどの女神の神力でもある。

強いて言うならば、これは、彼女という存在にのみ与えられた者から。

他者を育み、愛しむ地の女神の末裔。彼の女神の血が抱いた、女神たちの神力。

永い刻の果て、それらが、少女のなかで均衡を得た。

風に散らされた土を画布にして炎に熱せられた水の雫を色彩となし、幻想を描き出す。

四柱の女神の神力を全て身の裡に秘めた稀有な存在ゆえに、彼女は擦り合った間に生まれる幻影しか操ることができない。

その神力に、方向性を与えるものがいなければ。

例えば 水女神の神力を得た、祭司。

彼女の血族によりその稀なる神力の在り様は秘され、持ち主たる彼女すらもその希少さを知り得ない。

それでも戒めは確かに緩み、リンカはアルヴィスの腕におさまっていた。

後ろから、ぎゅっと抱き締められる。

「アーヴ……助けるのが遅いよ、あんた」

こんなときになのに、アルヴィスの言葉はどこまでも嬉しくて、くすぐったく感じてしまう。

誤魔化しに唇を尖らせたリンカの身体が反転して、リンカはアルヴィスの胸に抱き込まれる。

頬に直接響いてくるのは、かすかに早いアルヴィスの鼓動。

なぜだろう。

アルヴィスの肩も、腕も、胸も、リンカよりも大きいのに、アルヴィスに抱かれているのではなく、アルヴィスを抱いている気がする。

「アーヴ」

「すまない……本当に」

「……どうして？ それに、あの腕の持ち主は……」

「すまない……」

繰り返される言葉。

ひときわ力がこもったあと、リンカの手押しつけられたのは、抜き身のままの宝剣。

リンカの波動を放つ 柄にリンカの響銘石を飾った、おそらく二年間アルヴィスがその身から離すことがなかったであろう剣だった。

反射的に握り締め、アルヴィスとしっくりと馴染む刃とを、リンカは見比べた。

かすかに頬を引き寄せ もしかしたら、笑みだったのかもしれない アルヴィスは突然、リンカを腕から放り出した。

「きやあ！」

突き放され、背中をしたたかに壁にぶつける。ばしゃり、と間髪入れず頭から降り注ぐのは、冷たい水。

アルヴィスが、からっぽになった水差しを放り出す。

からからと、床を水差しが転がっていく。

「いきなりなにッ！」

怒鳴ったリンカの頬に、掠めるような口付け。

「時間が、ないんだ」

水の滴る髪に触れて、付け足しのように一瞬微笑んで

。アルヴィスの唇が、歌めいた真言を紡ぐ。

「アーヴ!?」

「昔話をひとつ、しようか。この城市は我ら一族と女神との古き契約に拠り、女神に護られている。だからこそ、砂漠の果てにも関わらず、清水が湧き緑が芽吹く。ただし、契約に則って西の位に立てた生贄を捧げる限り。だが、近親婚を重ねた一族には、子が生まれなくなった。それでも、贄を差し出さねば城市ごと滅びる。最後の贄の適格者は、俺の……俺と、あのひと、セレの従姉だった。俺たちは彼女をみすみす殺せずに考えた。一族に適任がいなければ、他族から。それも、タレジュ女神の血を多少なりともひいている、砂の民から連れて来ればいい、と。砂の民に生まれた、稀有なる娘の噂を拾ってきた者もいた。どちらにせよ、二年以上も前の話だ」

「いきなりなんの話をしているのか、わからないわよ!」
「そうだな。わからなくてもいい。俺が語りたいたいだけ。知らなくてもいい。ただ、輝かしき穢れに満ちた砂の長妃。あなたは、自分の価値を知るべきだ。その上で、あなたに相応しい場所を見出しなさい。あからさまな穢れを穢れと恥じぬ、あなたの在るべき場所を」

「なによ、それって!!! あんたが、それを言うの!?!」
「お気に召さなければ、耳に清かな言葉でも。たとえば……」

俺はあなたを、護れない。できるのは、あのひとから遠ざけることだけ。

耳たぶに口付けるように、アルヴィスが屈み込んでくる。ふわり、とほのかに薫る骨の髄までこびりついた香。

囁きはするりと耳に忍び込んで、染み込んで刻み込まれる。

護る?

苛立つほどに甘い言葉はリンカの胸をあたたためはしたけれど、それはリンカの希んだことでは決してない。

そんなことを、誰が……!!

憤りを叩き付ける前に、会話はあっさりとアルヴィスの笑みに切り捨てられる。

「所詮は同じ意味だよ。さようなら……リンカ」
くるり、と視界が歪んで、空気が変わる。

引き離される?

咄嗟に伸ばした指先はただアルヴィスの蒼い衣を掠めた

だけ。

「ッ！」

喉から引き絞ったなにかは、音にもならず　消えた。

傷口から皮膚を剥ぎ生々しい肉の赤を見せ付けるように、リンカを包む風景が変わる。

ふわふわと揺れていた寝台の薄紗は、ざらついた粗い焼きの煉瓦塀へ。

髪をなびかせどこか遠くを見据える三女神を戴いた天は、砂に煙り星さえもおぼろな、廃屋じみた建物に切り取られた闇空へ。

ぱしゃり、と身じろぎするたびにさざなる水が、へたりこんだリンカの腰から下を浸している。

そこには、今の今までリンカが嗅いでいた香の薫りなど欠片もなく、ただ安酒と腐りかけた食物と汗と……かすかな血の匂いだけが鼻に付いた。

路地の向こうから嬌声。怒声。掠れた声で詠うつたびとたちの詩。

灯りさえも遠い城市外れの泉のなかに、リンカは呆然と座りこんでいた。

曇った星の光とこれだけは鮮やかな月のかたちが、水に映る。

頭のとっぺんからつま先まで濡れそぼち、滴る雫が水面を揺らす。

髪にたつぷりと含んだ水がこめかみに溜まり、撫でるように顔の輪郭をなぞっていく。

どうして。

呟いた言葉は意味もなく、ただ音だけが宵闇に吸い込まれる。

胸のなかが、すんと落ちてなにもない。四肢は、本当にこの身体に繋がっているのか。

からっぽ。

怒りたいのか、笑いたいのか。

全てを見失ったまま、リンカは右の指先を水にひたして、するすると揺らす。指先から、泡が生まれる。片方の手はぎゅっと握ったまま、開くどころか緩みもしない。

ふしぎ。

童女のように首を傾げた瞬間、リンカの間が、ひとつ

の気配を引き寄せた。

足音。

ひどく肌に馴染む、懐かしい息遣いも。

「燐火！」

呼び声も。

なにもかもその手から取り落としたままで、燐火はその影に向かいにつこりと微笑んだ。

自分とおなじ姿が、そこにある。

だいじょうぶ。もうひとり、『燐火』がいる。

じゃあ この『リンカ』は、壊れてもいいの？

にこにこ傾いた感情のままに笑むリンカにその人影
カイの顔が、ひどく歪む。

ざばざばと、水のなかに入ってくるカイに、リンカは微かに息を飲んだ。

凧いだ水面が、乱暴に乱される。

がちり、とカイのまだ細い腕が、リンカの肩を掴む。

「笑ってんなよ、頼むから……」

「どうして……？ あたし、今どんな顔をしているのかわからない。笑うのは、楽なの。どうしようもなく、楽にできるの」

なのに、なぜ邪魔をするの？

ぼかんとしたリンカに、もどかしげに眉を顰めカイが噛み付く。

「泣けよ。なにも感覚がないって言うなら、俺が決めてやるよ。泣けよ、ほら！」

がくがくと、歯が鳴るほど乱暴に肩を揺さぶられる。

「泣けよ、馬鹿！」

勢い余り、リンカの額がカイの額にぶつかる。

痛い。

ふつふつと、足元から沸き上がる感情。

「泣けっば！」

「泣けっば、言われて泣けるもんじゃないわ！」

下手な詩のように繰り返される言葉にとうとう憤り、リンカは勢い良くカイの腕を払った。

叫んだ言葉が、勝手に胸に染み込んでいく。

泣けっば言われて、泣けるもんじゃない。

「そんなに、簡単なもんじゃないのよ……ッ！」

それは本当。

でも 本当の本当は……。

ぼろり、と一粒、涙が零れた。

あとは、ひどく簡単だった。
湿ってしまったカイの服にしがみつき、リンカは声をあげて泣いていた。

喉が、痛むほどに。

知らず解けた指先から、一振りの宝剣が滑り落ち、水底に音を立てた。

終

暗闇に侵蝕されていた空が、鋭くもどこか甘い朝日に溶けていく。

瞳を射る光は、目覚めの白。

潔癖な清らかさを思わせる、暁の色だ。

夕暮れと大差はないはずなのに、なぜか夜明けの色彩は
灰白い。

清濁全てを飲み込む夕の深紅とは、相容れない白さだ。

濡れた髪を気休めに布でかきませながら、リンカは窓辺に座りいびつな城市の影に縁取られた早朝の天を眺めていた。

膝の上には、ひび割れた宝玉　リンカの神力の源・響
銘石を飾った宝剣。こびりついた赤褐色は、女神の色彩を
得た青年の血。

審判が下る。

そんな張り詰めた胸の想いに、相応しい景色だ。

背後で、裁きを司る者　罪人と同じ肌、同じ髪、同じ
瞳を具えた少年が、罪人の名を呼ぶ。

「燐火」

壁にべたりと寄り掛かり、リンカを見詰めるのはカイ
リンカの兄であり、砂の民の若長。

よくも長老を亡くしたこの時期に里人たちがカイを外へ
出したものだ、今更ながら不思議に思っ。

「あたしは、里には戻らない」

何度目になるかわからない、問答。

「戻るつもりなんて、欠片もない」

「負けないように、圧されないように」。

オパール色の瞳に力を込めて、同じ色彩の瞳を見詰める。

「燐火……隠れ里の掟を、憶えているか？」

「……里人は、長の赦しなく里の外へ出てはならない。こ
の禁を破る者は、地の果てまでその血族に追われ、相応の
罰を受ける……。忘れたことはないよ。縛られるつもりも

ないよ」

「神力ある我らが誰にも支配されずに生きるためには、できる限りその存在を秘さなければならぬ。当然のことだろ」

「神力ある我ら。」

『あなたは、自分の価値を知るべきだ』

みんな、リンカの知らない理屈で同じことを言う。

くすり、とリンカの唇が笑みのかたちを歪む。

「燐火」

咎めるように名を呼ぶカイ。

それを笑い飛ばすように、リンカは嘲りを響かせる。

「あたしは、まともな神力もない立派な役立たずだから、そんなの知らない。お偉い神力遣いさま方の理屈なんて、いつそない神力を誇るしかない出来損ないにはなんの意味も持たないよ」

ふざけたこと言ってるなら、とっとと消え失せなさいよ。

乾き始めた毛先を指で弄くりながら、さも目障りといわんばかりにそっぽを向く。

そんなリンカに、カイがどんな対処を施されなければならぬか、それをわかっていながら。

リンカは、その瞬間を待っていた。

「燐火は……自分の価値を知らなすぎる」

「そんなの、くそくらえだわ」

誰かも、同じことを言ってるリンカを放り出した。

知らず浮かぶ微笑。

カイが手首に巻いた革籠手から細針を抜き出すのを、夢に溶ける心地で見ている。

ぴたりと首に突きつけられるのは、数日前にリンカの肩を貫いた鋭い切っ先。

「掟に従い、俺は、燐火を連れ戻すか……それが叶わないなら、殺さなければならぬ」

「殺すなら、殺しなさいよ。あたしは絶対に、里には帰らない。魂だけになっただけだ」

肩に負った傷の、痛みはきちんと憶えている。

怯えてしまいそうな自分を制して、リンカは顎を上げた。

これから語るのは、一片の嘘もない気持ち。

穢れていても、自分勝手であっても、カイにだけは知って欲しかった。語りたかった。

自分と同じ血肉を分け合った　半身だから。

「里にいる間、あたしはただの肉の塊だった」

「燐火!？」

「だって、神力を自由に操る里人のなかにあつて、あたしはただ触れることさえ出来ない幻影しか操ることができない」

「おまえは、女神の直系じゃないか。誰にも、蔑む権利はないし、おまえだって」

馬鹿正直で、まっすぐなカイ。

「そうね。あたしの価値はただ、女神の直系としての血の色だけ。その血で子を成して、そして死ぬ。それは、あたしの血肉の価値だわ。あたしの価値じゃない。あたしはずっと、そんな価値しかあたしにくれなかった、里も、里のみんなも嫌いだった。大嫌いだった」

それに 同じ姿でリンカの無力を引き立ててくれた、カイも。

「お前は、知らないだけだ……」

カイが、傷付いている。

それがわかるから、リンカはじっと、銀色にひかる切っ先に視線を止めていた。

カイの傷は、リンカにも痛い。

でも、痛みだけではない想いを感じているリンカは、もう、どうしようもなく歪んでしまっているのだろう。

カイの痛みを喜んでしまっているリンカは、きつと、地の底の昏い闇に封じられた魔神に迎えられる。

天の神々には、決して逢えない。

出来損ないであつても魔神の末裔として、これ以上の誉れはあるだろうか。

心残りは、ひとつだけ。

最後まで、泣かせてあげることさえ、できなかつたこと。

「婆さまが死んで……殺されて、あたしだって哀しかった。もう逢えないと思うと苦しくて、アルヴィスを憎んだ。でも……あたしは、婆さまが死んだことよりも、アルヴィスが消えたことの方が辛かった。アルヴィスが婆さまを殺した、そのことの方が心に食い込んだ。勝手に、あたしは選んでた。婆さまよりも、アルヴィスを」

『リンカ』を見てくれた、アルヴィス。

リンカの腕に初めて価値をくれた。

抱き締めることで誰かを癒せるなんて、錯覚でも初めて知った。

全部がただの錯覚でも、その感覚ごとアルヴィスを愛している。

自己愛にすぎないと、言われても。

「灰」

息を詰めて、覚悟を決めて、リンカはカイを見上げた。

目の下に、小さなしわが寄っている。

薄い唇が、噛み締められている。

なにかを堪えるような顔をした、カイ。

リンカは、カイにひどい顔ばかりさせている。

二年前、里にいるカイは、よく笑う感情豊かな少年だった。その代わり、リンカは強張った顔のまま時を過ごしていた。

いま、リンカは身勝手に動き、カイはその分が感じながらに縛られている。

双子に生まれた自分たちは、同じ絵札の裏と表なのかもしれない。決して、同じ想いも感情も分け合えない。でも、繋がっている。

そんな埒もないことを、ちらりと考えた。

「あたしは、自分のわがままを優先させて里を捨てても、なんの罪の意識も持っていない。その代わり、裁きを受けるのも覚悟してる。だから灰は、あたしを殺してもいい。この焔火に、罰を」

静けさとは全く逆の感情が胸に渦巻いているのに、なぜかひどく風いだ気分になっていた。

迷ったり、苦しんだり。

回りがぐちゃぐちゃになって、自分の手の小ささを思い知らされたとき、リンカとて死にたくなる。全てを無にしたい。自分をも、無に帰したいと願うアルヴィスの疲れを、リンカもわかるような気がする。

罪には罰を たったそれだけで、楽になれる。だけ。

……そうであっても。

カイの手は止まったまま 揺らぎもせず、さりとして刃が退くこともない。

空気が、豎琴の絃のようにぴんと張り詰めている。

一瞬の、真空。

その大気を乱し張り過ぎた絃を切ったのは、艶めいた女の声だった。

「わたくしも、お話に入れてくださらない？」

引き切られた弓から矢が放たれるように、無音の音を響

かせカイの腕が空気を裂く。

女の波打つ髪を一筋縫いとめ、針は壁に食い込む。

一拍の遅れのあと、床に散らばるのは漆黒。

神秘の黒に神性の蒼を重ねた、美しい女が扉を背に立っていた。

「てめえ……ッ！」

「あんたは？」

同じ質の聲が、見事に重なる。

興味深げにふたりの顔を見比べて、女は赤く塗りこめた唇を赤く染めた爪でなぞった。

「あなたが、リンカ・イン・サアリ……ふたりとも、よく似ていらっしやること」

まるで、宝玉の品定めをするように、あたたかみに欠けた瞳。

リンカはきつい瞳で、そのうわべだけ甘い蒼の双眸を睨み付けた。

「あんたは、誰？」

「燐火！ 関わるな、こんな女」

「こんな女とは、ご挨拶ですこと。自分には用がなくなつたからと言って」

「あんたは黙ってる！」

「灰の知り合い？」

「燐火！」

「わたくしは、ただ、あなたの協力がしたいだけの女ですわ。リンカ・イン・サアリ……サアリの姫君」

ほんのすこし目尻の下がった瞳が、艶美に細められる。

腰の辺りで重ね逢わされた手は、魚のよじにしなやかで、滑らかに見えた。

きつと、触れたら凍えそうなほど冷たい。

「あんたに協力される謂れなんて、ないわ。女神の蒼の瞳をお持ちの、神官サマ」

「あなたの大切なひとを救う術を、わたくしが知っているとしても？」

思わせぶりに、女が囁く。

鼻を鳴らし、リンカは言い捨てた。

「あんたが、なにを考えてるのか知らない。だけど、そんな怪しい言葉、切り札に出す人間、信用できない」

「信用なんて、要りません。ただ、わたくしのちからを必要としているか、そして、わたくしにちからを貸してくだ

さるか。それだけ」

簡単に放り投げられた言葉。

さらり、と薄絹を重ねた衣を揺らして、白い白い手が差し伸べられる。

こんなつまらない言葉で騙される奴なんて、本当の馬鹿しかない。

ずつぷりと含んだ、毒と嘘を感じずにはいられない。

「焔火！」

立ちあがったリンカを戒めるように叫ぶ、カイ。

長い間、深紅に染んだ夢を見ていた。そう　深紅の悪夢を。

悪夢の果てに掴むものが、悪夢よりもましな現実だなんて、誰が決めた？

宝石のように、小鳥のように閉じ込められていた箱は鍵開かれ、リンカの足許にはなにもない。

ならば　いま、リンカの取るべき道は？

「……あんたの嘘に、今は乗ってやる……」

悪夢は醒めたはずなのに。

夢の果てにこの手が掴む現実を、今もリンカは探し、彷徨い続けている。

「止せ、焔火！」

心底リンカを案じているはずの手ではなく、こんな怪しい女の手を取ってみせる。

「あんたの、名前は？　それくらい、訊かせてくれるでしょう？？」

予想通り氷のような女の手に自分の褐色の手を重ね、呟く。

どこかで記憶にある、不穏な冷たさと、寒気。

それがどこであったのか　思い出せない。

もう一方の腕に握り締める宝剣が、かすかな響きを指に伝える。

うつそりと、女は微笑んだ。

獲物を見付け舌舐めずりをする、獣の風情で。

「アリアズナ……アリアズナ・ヴィナ・シエーラですわ、姫君……リンカ」

それが、醒めない新たな悪夢の始まり。

終

『五番目の女神・夢の果ての夢』 桂木香椰 著

sakka.org